

新國文讀本

卷六



375.9

Y019

資料室

41423

教科書文庫

4
810
41-1933
200030
1915

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

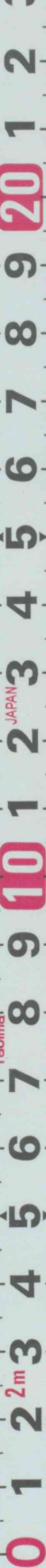
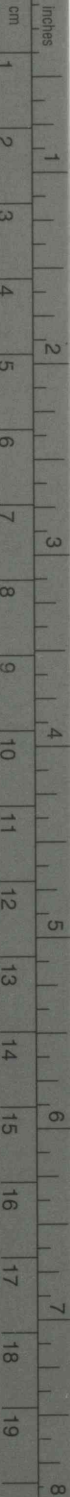


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

375,9
Y019

文部省檢定濟

中學國語教科用書 昭和八年一月十三日
實業學校國語教科用書 昭和八年七月三十日

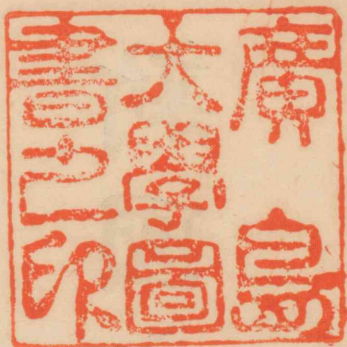
吉田彌平編

新國文讀本

卷六

東京 光風館藏版

吉田彌平編
新國文讀本
卷六
光風館藏版



新國文讀本卷六

目次

一	月の三月堂……………	東伏見邦英	一頁
二	松江の曉……………	原文 小泉八雲 譯文 落合貞三郎	六
三	空行く雁……………	〔會我物語〕	二三
四	會我兄弟……………	森 鷗 外	二七
五	平安京……………	藤岡作太郎	三
六	日本山水の鳥瞰その一……………	鈴木文史朗	三七
七	日本山水の鳥瞰その二……………	鈴木文史朗	四三

八	熊野落	〔太平記〕	兜
〇九	忘れ難き日	姉崎嘲風	弄
一〇	友に寄す	高山樗牛	忒
一一	作文趣味	高橋箒庵	屯
〇一二	朝の歌	島崎藤村	夫
一三	落穂拾ひ		八〇
〇一四	小枝の笛	〔平家物語〕	八
〇一五	如意輪堂	〔太平記〕	九
〇一六	月の夜さむ	〔新葉和歌集〕	九
一七	世界の歌枕	上田敏	一〇
〇一八	希臘人の體育	永井潜	一三

一九	偉人	嘉納治五郎	一三
〇二〇	雙が岡	萩原井泉水	一三
二一	仁和寺の法師	兼好法師	一三
〇二二	世の中		一四
〇二三	武士道	山路愛山	一四
二四	大死一番	徳富蘇峰	一五



新國文讀本 卷六

一月の三月堂

東伏見邦英

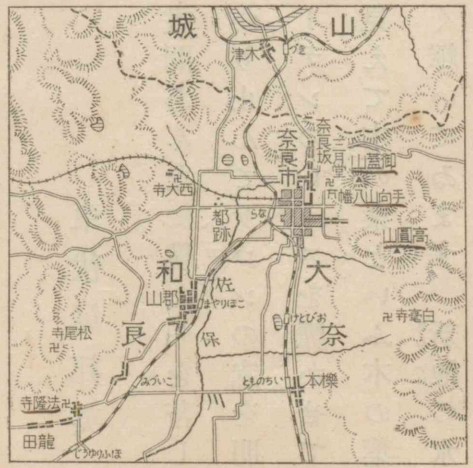
法隆寺へいつた夜の事でした。晝間あんなに僕たちを苦しめた雨は、夕食の済んだ頃にはすっかり止んで、サロンの窓を明けると、すがすがしい風が静かにカーテンのレースを靡かせておりました。まだ止んで間もないと見えて、木の葉といふ木の葉、草といふ草は悉く露を宿して、美しく輝いてゐます。新池の水面は一面に靄が立ちこめて、菊水の燈火はほんやりとしか見えませんが、三絃の響は靄を縫つて擴がつて來ます。春の夜短しと、

三月堂
 本名は法華堂又金鐘寺
 奈良東大寺の境内にある
 東伏見邦英
 久邇宮邦彦王の第三王子
 伯爵
 明治四十三年生
 法隆寺
 奈良七大寺の一
 聖徳太子の御建立
 サロン
 大廣間
 Saloon
 カーテン
 Curtain
 窓掛
 レース
 Lace
 紐

新池
狹澤池の東にある池
菊水
狹澤池の北岸にある
旗亭

池の向に燈る
月波もかきよれは
今宵も花の
影中をりける
詩
ニナレハヤナ
ニアラハスオドノ
御蓋山
又三笠山
春日山の一部

宴方に酣たむかなのでせう。此の静寂な古都の朧夜ろうやに、何處からともなく傳へ聞く樂の音も詩趣しじゆの多いものですが、それにもまして力強く僕に迫るもの、それは總べての不淨じじゆを流し去つた時の大地の匂ニホヒと、梢こしから滴る水の音とです。ぼたり、ぼたり、又ぼたり。椿つばきの花が水面に落ちるやうな、そしてつともつと澄んだ、晴々した、落ちつきのある、底力のある音です。今眼の前の一滴が落ちました、さら〜と美しく光りながら。今晚は満月に當つてゐます。月に對して特別の感興を起す僕は、この二三日、御蓋山みかさから登る月を、どんなに喜んで見てゐたか

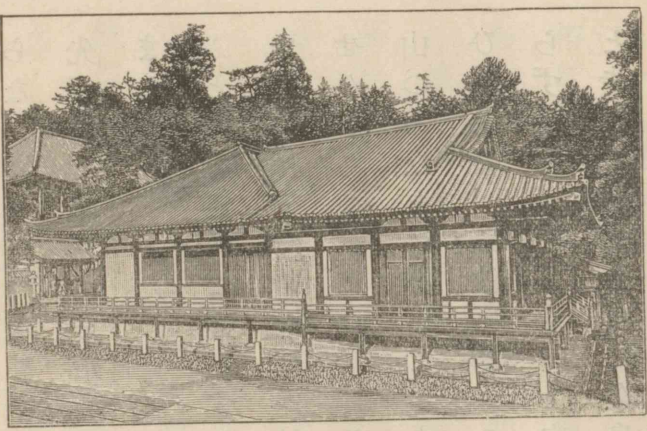


近附市良奈

イースター

Easter 復活祭
三月二十一日以後の満月の次の第一日曜日に

Moonlight Sonata
月光の曲
ベートーベンの傑作の一



三 月 堂

知れませんが。四月の満月はイースターの日を定めます。全キリスト教徒にとつて、何等かの意義ある満月です。併し雨は止んだとはいへ、空一面は淡雲で覆おほはれ、あら名月は徒むなに雲の裏面のみを照らして、淡雲をとほして漏れる月光は、見る人をして夢のやうな淡い感じを起させます。この様な時に、僕は月に對する己みがたい感情から、ムーンライト、ソナタを弾かないではゐられません。勿論僕はこのソナタにこんな名前をつけさせた二種類の物語

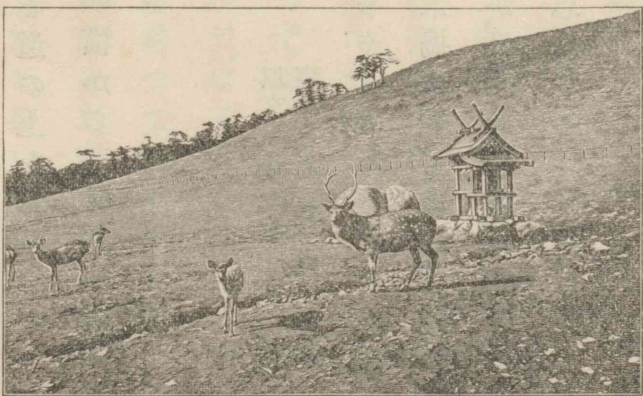
高圓山
御蓋山の南にある山

を信ずるものではありませんが、他に月に因んだいゝものを知らないので、いつもこのソナタを弾くやうになつてしまひます。先づ第一樂章から始め、一氣に第三樂章まで弾ききつてしまひました。

ふと頭を窓外に廻らすと、さつきまで大空一面をとどこめてゐた淡雲は、何時の間にか拭ひ去られて、月が出ゝあるではありませんか、あこがれの明月が。もう御蓋山からは大分離れて、高圓山のあたりに輝いてゐます。思はず僕は外へとび出してしまひました。新池に崩れる月、五重塔の臺の反射。僕等の足は知らず識らず三月堂へと向つて、公園の中を、少し寒いので、せつせと歩いてゐました。奈良朝の我々の祖先の幾家族かは、何代かに互つてこの邊にも住んでゐたでせう。そして月明の夜など

雪消の澤
奈良公園の南部

には、やはりこの雪消の澤の邊をさまよつた事もあつたでせう。人一人通らぬこのあたりの大木の梢に隠見する月は、一寸物凄く感じられます。僕等は南大門の方へ曲る道を間違へたので、結局若草山の麓から三月堂へと廻ることになりました。晝間の賑かさに比べて夜の静けさ、何といふひどい變化でせう。月と、松と、若草山と、道と、そして僕等の影法師と、他に何も動きませぬ。土産物を賣る店はすっかり閉ぢて、料亭も、軒端にたつた一つ灯が寂しくついてゐるだけです。



山 草 若

手向山八幡
東大寺の鎮守
同寺の東約五百米に
ある

小泉八雲

Lafcadio Hearn
(1850—1904)
詩人、小説家、
翻訳家、ハイン
ランド

落合貞三郎

英文學者
學習院教授
明治八年島根縣松江
生

洞光寺

松江市雜賀町にある
曹洞宗の寺

若草山は靜かに眠つてゐる。鹿もゐない。時々松が風に揺れる。道が光り、道の小石が光る。光る道の上を影法師がするする動いて行く。そして手向山八幡の横から三月堂の前へ出ました。(寶雲抄)

二 松江の曉

原文 小泉八雲
譯文 落合貞三郎

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で最も哀れに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。それから禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を

大橋川
中海と宍道湖とを通
ずる川

揺がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の寂しげな音が晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、大根やい。「蕪菁や蕪菁。」「薪や薪。」明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟かな緑の雲越しに朝景色を眺めやうとした。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わななくやうに萬象を映寫して微かに光つてゐる。此の川は宍道湖に向つて口を開け、湖は右手へ擴がつて、はるかな連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸が皆締つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水のはなに長くたなびいてゐる。その星雲状をした長い帯は、日本の昔の晝で見る通りであるが、實際の



湖 道 穴

現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峯から峯へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙かに大きく、味爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢のやうな一帯の丘陵ははてしない土手道かと怪しまれる。そ

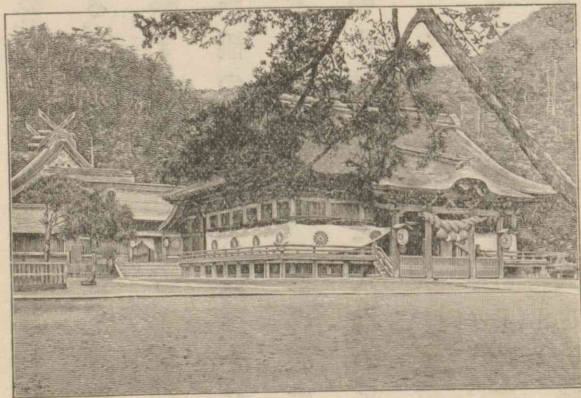
して霧が立つに連れて、その趣は徐ろに變つて行く。朝日の黄色の縁が見えてくると、今までのよりは更に弱い、細かな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の爲に蒸氣の立つ黄金色へとかはる。朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見たことがない。正にこれ蓬萊の夢である、霞にぼやけた船の精靈である。しかし此の精靈は雲と同様、光線を受けて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。庭先の川端から手を拍つ音が起つて来る。一回、二回、三回、四回、その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし對岸の埠頭

の石段を下りる男や女の姿が見える。めい／＼帯に小さい青手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、軽い、優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴き日の造主よ。このこゝちよき日光を賜ひて世界を麗しくなしたまふことを謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人の衷心である。

杵築の大社
官幣大社出雲大社
祭神は大國主命

一畑山
鳥根縣簸川郡にある
名刹
本尊は藥師如來

朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概是西の杵築の大社に向つてもさうするのである。顔を東西南北に向けて群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふといふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に従ひ、掌を合はせて軽く擦るものもある。しかし日本で最も古い此の國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も誰も古風な神道の祈の文句を唱へる。「拂ひ給ひ、淨め給へ、とほ神ゑみため。」



出雲大社

手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始り出し、橋の上にはからころといふ下駄の音がだん／＼高く響いてくる。大橋の上で鳴る下駄の音は忘れられない音である。――速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人の足がちらく／＼するのは驚くべき光景である。この足は皆細くて、恰好な均齊を得てゐて、希臘の古甕に描いた人物の足のやうに輕やかである。

やがて學校へ急ぐ子供たちが出てくる。彼等の駆ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動するのは、ちやうど大きい蝶が羽搏きをするやうである。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げるし、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は煙突から煙を吐

きはじめる。(まだ知らぬ日本の瞥見)

三 空行く雁

養和元年

(1181)

一萬

曾我十郎祐成の幼名

箱王

曾我五郎時致の幼名

父

河津祐泰

祐親の子

安元二年(1185)工藤

祐經の部下に殺され

た

曾我殿

祐信

工藤一藹

祐經

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、いかに母御前、父はいつくにおはしますぞや。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣く／＼のたまひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ」と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、狩場より歸りたまふ道にて、工藤一藹とや

鎌倉殿

源頼朝

系圖

家次 源野四郎

祐次 祐經

祐時 工藤
祐茂 字俊美三郎

祐家 六郎太夫 祐親 河津次郎
祐清 伊東九郎

祐泰 河津三郎 祐成 曾我十郎
時致 曾我五郎
律師

宗茂 野野介 茂光 野野介
工藤介

らんに射られて死にたまひぬ。と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆



曾我重廣 藤重 兄第 飛雁 雁を飛
見を雁飛第兄我曾
(會圖語物我曾)筆重廣藤安

より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さん。とや思ふらん。我等が此の里にあるを知らてや。過ぐらん。など大人しく語れば、母

より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄

弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見たまへ、箱王殿。空に飛ぶ翼も、別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も、馬鞍弓矢をもちて物を射ありく事の羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ参らせらるゝぞや。とて、袖に顔を差入れてさめざめと泣きければ、弟も小賢しく顔をあはせて泣きゐたり。一萬

の乳母の女房これを聞きて、あなあさまし、人もこそきけ。いかに和上藤たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とくとく入らせ給へ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りけり。其の後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯目ばかりを見合はせて、互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄矧の小矢を取添へて遠侍を出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺合ひ、射取りて後には、とも

遠侍
大小名の邸宅の外に
別に構へた番所

かくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ」といひければ、弟も打領きけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。(曾我物語)

森 鷗外

名は林太郎
醫學者
文學者
醫學博士
陸軍軍醫總監
皇室博物館總長
石見國津和野生
大正十一年薨
年六十一

四 曾我兄弟

第四幕

森 鷗外

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂新開荒二郎忠氏ある。

第一の大名 最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はどう致いたやら。(第二の大名に) 固より曾我の殿原は奸盜山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩附になり申した。

第二の大名 情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御座所近く推參致いたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

(雑色登場。)

雑色 只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

(雑色退場。五郎登場。大見小平太實政繩を取る。狩野座を進む。)

狩野 曾我の五郎、承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、敵討の宿意を尋ねる爲ぢや。さあ逐一に申し立てい。五郎(怒る)だまれ、狩野介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和のため自滅に及んでからこのかた、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を汲む、由緒あ

伊東の次郎祐親

祐家の子

治承四年(八四〇)頼朝の怒に觸れて自殺した

曾我氏系圖

(四男)(七代)

武智麿(乙麿)……

……爲憲……(六代)(孫)

(工藤)

維次

一家次(前課系圖参照)

武智麿

不比等の子

藤原南家の祖

る身分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれがかなはぬなら、何事も申すまい。

狩野 けしからぬ事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開 それを彼此申すのは、

犯人の身となつても

まだ君に楯つく所存

か。

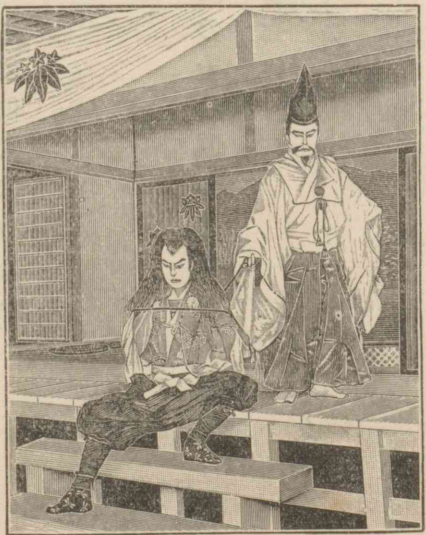
頼朝の聲 (簾の内より) いや、待

て、狩野、新開。曾我の

五郎が申す條尤もな

れば、頼朝みづから聽いて遣はす。

(簾を半ば捲く。頼朝登場。舍人二人、近臣二人随ふ。狩野退く。新開



曾我五郎舞臺姿

中央に残る。

五郎（新開に）そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにては、和殿に物言ふに似て、快うない。

將軍 新開、退いて遣はせ。

新開 はあ。（新開退く。）

將軍 見れば昨夜の雨に、その土は濕つてをる。誰かある。曾

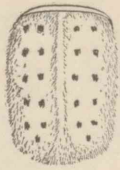
私の五郎に敷皮を取らせい。

卒 はあ。（卒右手より敷皮を持出で敷く。）

五郎（感激す。）

此の敷皮を見るにつけ、十年の昔ぞしのぼる。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利のた



敷皮

平相國親子
平清盛とその子宗盛

めに訴訟を構へ、怨毒によつて残害を行うた、小賢しき敵工藤が、時勢の移り變るに乗じて、宇佐美殿によつて御目見えを賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽足らいて、我々兄弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲、

兄一萬は十二歳、

此の箱王は十の時、

由比が濱邊に伴なはれ、

引据ゑられし敷皮は、

夢見ごこちに春を待つ

蒼を摧きし悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨をはらし、此の世に思ひ置くことなければ、

最期を急ぐわが爲に、

此の一枚の敷皮は、

父に見えん彼岸に

渡す弘誓の舟筏。

有難く拜領いたす。(敷く。)

將軍 殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を

討取つたのは、年頃の企か、但しは俄の思立ちか。

五郎 それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは、十七年の昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜんのだが、兄が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍 然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび、乃

足柄附近



大藤内
備中吉備津の宮司
大藤内成景

至十たびも鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎 いかにも其の往返には心を付け、足柄箱根大磯小磯由比小坪のあたりにたゞずみ、兄弟付け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍 ふん。さもあらう。叔工藤は父の仇ゆゑ子細ないが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎 固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、又向ふものあらん限り、千萬騎をも切りなびけうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃行くゆゑ、後日のため一太刀づつ印を附けたまででござる。

將軍 して、大藤内はなぜ討つた。

五郎 あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切りすてはいたいたが、所領安堵を喜んで下國する途中、報謝のために引返したは、せめてもの心掛、今はなかく不便に存ずる。

將軍 神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏込んだ。

五郎 これは憚ある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道主人ではござらぬか。それが、成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅致いた。又敵工藤は格別の御引立を蒙つた。これらの遺恨なきにあらねば、一太刀お恨み申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

三浦殿
名は義澄
義明の第二子
正治二年(八六〇)歿
年七十四

將軍 おう。好う藏さずに申したぞ。此の度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。

五郎 さやうなもの一人でもござらぬ。

將軍 さはいへ、母には打明けたであらうな。

五郎 こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にに往けと申す親のござらうや。

將軍 おう。一族否運に陥つたそちが申し條としては、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲(上手背後にて) はあ、四郎忠常只今それへ。

(仁田、首桶を持ち、登場)

仁田 仰によつて曾我の十郎が首級、これに持参いたいてござる。

將軍 五郎。兄に逢はせて遣はずぞ。それ、いましめ解け。

(天見五郎の繩を解く。)

仁田 實檢の上、申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對面いたされい。(首桶を開く。)

五郎 懐かしや、兄上。

の 點し列ねし松の火

消えなば共にと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても、兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛



曾我十郎舞臺姿

くとも、時致だに居合はせたら。

仁田 いや。和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運つたなく、我が薙刀に拂はれて、又はほつきと鏢元から。

五郎 なに。兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上に佩かせなんだか。

仁田 おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといった某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。

五郎 さてはよしある御身が手に、兄上好んで掛られたか。

(五郎歎く。犬房丸鞭を持ち走り出づ。)

犬房 父上の敵、思ひ知れ。(五郎を鞭うつ。)

五郎 や、この小童は何者ぢや。(五郎睨む。犬房たじろく。)

仁田 犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎 なに、犬房丸が御身か。

彼も人の子、穉くて

親を討たれし悲しみは

いかでか我に異ならん。

果報の繩に引かれずば、

刃を取りて立向ひ、

御身に討たれん我が身なり。

刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ、其の

筈で打つてくれい。

犬房 父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言

うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎 おう。さうか。さあ、につくい小わつば、打たれるなら、打つ

て見い。

犬房 なんの打たいで。おのれが、おのれが。(連打す。)

將軍 もう好い、好い。犬房、それで堪忍いたせ。

犬房 はつ。(鞭を棄てて平伏す。)

將軍 五郎。此の上問ふべき事もないが、頼朝關外の職を辱うし

て、勇士猛卒を惜しむこと何物にも譬へられぬ。どうぢや。

志を翻して奉公致してくれまいか。

五郎 それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に

任せるなら、某は犬房に此の素首を取らせ申さう。犬房が

關外の職
上古王者ノ將ヲ遣ハ
スヤ、跪イテ穀ヲ推
シテ曰ク、關以內ハ
寡人之ヲ制セン。關
以外ハ將軍之ヲ制セ
ヨ。(史記、馮唐傳)

討たいでも、

近き恵に代へられぬ

遠き恨のまつはれば、

いつ謀叛人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた
兄を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外

ござらぬ。(天見に) さあ、繩を打たれい。

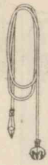
大見 いや、某は五郎丸が掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預
り、又君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つす
べを知らぬ。

將軍 待て、勇士を失ふは遺恨ながら、其の志は奪ふべからず。五
郎が繩は頼朝が手づから打つて遣はさう。

五郎 (居直る) こは思ひも懸けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ御繩

を拜領致さう。

不動の絹索
兩端に金剛杵の半形
をつけた索



將軍 (起つ) わが打つ繩は不動の絹索難伏のそちには、相應はしか
らう。いでく。
(階を降らんとす。幕。)

(鷗外全集)

藤岡作太郎

國文學者

號は東圃

東京帝國大學文科大

學助教授

文學博士

明治四十三年卒

年四十一

エキス

Extract 食物の主要成分の
みを少量の容積に
壓縮したもの

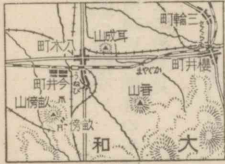
五 平安京

藤岡作太郎

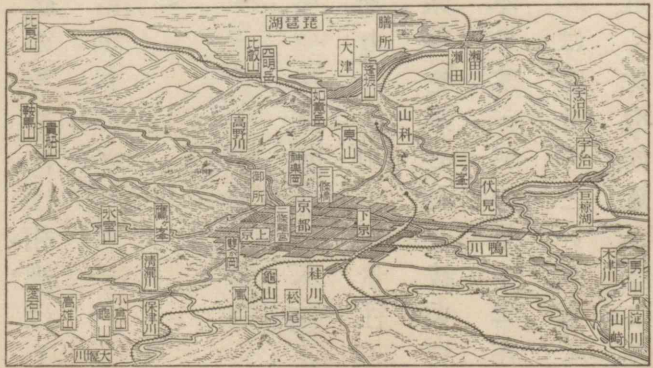
日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景往く所
として佳ならざるはなきが中に、殊に衆美を鍾め、群を抜いて立
てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキス
にしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、曄
麗幽婉の形態は備らざるなし。東に近く、比叡如意が嶽より三
の峯まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬・貴船・氷室・鷹が峯

四明が嶽
比叡山の頂

畝傍附近



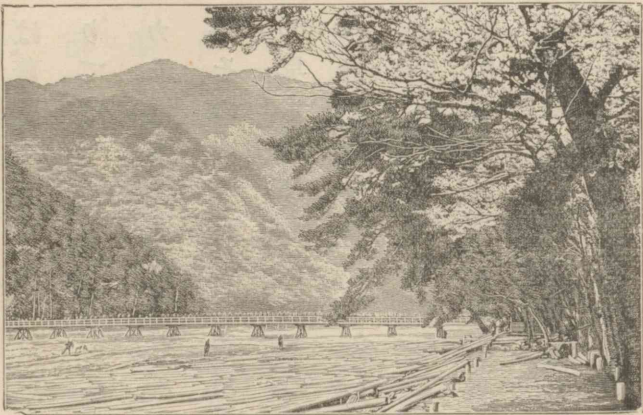
高尾の山々波濤の如く、西にや、隔りて愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、西の雙が岡は、大和の畝傍香山・耳成の三山の如く、近く相並びてあらねば、妻争ひの口碑も傳はらねど、子の日の遊に小松引く楽しみなど、いづれ劣らぬところから。



京都附近

南

にや、隔りて男山これに對すれど、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。



のなしといへども、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざる

京の東端に沿うて、鴨河の流、糺の河合に高野の支流を集めて南に珠を碎き去り、西に少し離れて、桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく又南に向ふ。二河南に合し、更に淀の急流に流れこみて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるも

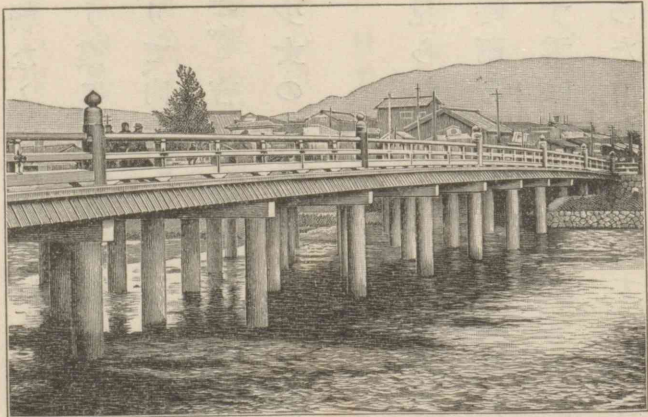
アルカリ
水に溶ける鹽基
の總稱

は、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出て入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などの居るところは、わけて、見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきはまことに惜しむべしといへども、海なくして清き京都はますく、その清さを加ふるなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所なるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やか

なる京都の朝な夕なが如何に變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、波俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なりく、て海を覆ふ。波の音は雲の中に入り、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か。世界はたゞ一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄じかりき。かくの如く壯絶なる景は、わが數年の滯留中遂に京都にて



三條橋から見た京山

向ふに寝たる
薄曇着て寝たる姿や
東山 (嵐雪)

は見ることを得ず。
されど下京より吉田に通ひたる朝な／＼の景色は今に恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ／＼彼方へ彼方へと淡くなりて、向ふに寝たる東山は有るか無きかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松は墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。
時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はら／＼と面を撲つ。あはやと驚きも果てず雲は走りて直に東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

(國文學全史)

鈴木文史朗

新聞記者

本名は文四郎

明治二十三年千葉縣

銚子町生

日本アルプス

信濃飛騨越中の國境

に連五する山脈を歐

洲のアルプスになぞ

らへていふ

常陸山

明治時代知名の力士

横綱常陸山谷右衛門

本名は市毛谷

茨城縣水戸生

大正九年歿

年四十九

六 日本山水の鳥瞰その一 鈴木文史朗

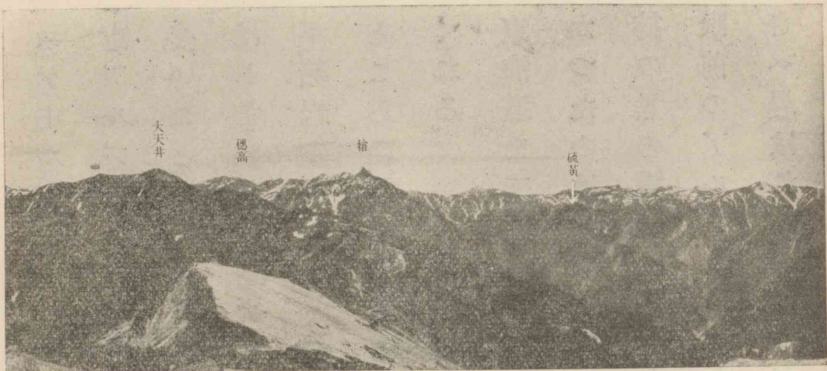
日本アルプスの穂高の上から白馬にかけての上を四千米の高
度で飛んだとき、僕は日本の代表山岳の全容とは言はぬまでも、
その一部の神髓を見たと思つた。日本アルプス中の北アルプ
スと稱せられる一帯の山岳の群、その中でも代表的なものとし
れてゐる穂高、槍、白馬などの一大連脈は、日本本土の棟梁のやう
なものであると豫て書物で讀んだが、いかさまその感じがする。
穂高から槍、槍から更に白馬に貫く山岳の連続は、力そのものの
象徴とでもいひたい。殊に忘れ難いのは、前穂高の筋骨隆々た
る姿で、往年の力士常陸山を思はせるやうな強さがある。その

日本アルプスの連
峯



前面遙か下に上高地の溪谷が淡く見え、その上に、焼岳を始め幾多の山の走線が、幾つもの「入」の字を左右から重ね合はせて見せてゐる。それから槍を中心として、白雪を湛へた大小無数の溪谷。槍はたしかに北アルプスの王座の威嚴を具へてゐる。槍に率ゐられるやうに、續く硫黄湯の俣、それに併行する常念・東天井・大天井などの諸岳の線は折れ重なつて、鯨の群でも見るやうである。更に野口五郎・赤牛・薬師等の山の背は、皆巨大な猛獸の背筋だ

アルプス
Alps
Swisse
(Switzerland)
瑞西
Italy
イタリー
伊太利



ア
ス
の
連
峯
けが並列してゐるやうな印象である。白馬の大雪溪は一反の白布を空から落したのが、そのまゝ、曲りくねつて、巨大な山塊の中腹に引懸つたやうな壯観である。總じて日本アルプスは、日本の他の山岳に比べて著しく形が變つてゐる。随つて、それから受ける感銘が全く別といひたいほどであることは、空中から瞰て明確である。歐洲のアルプスは、スイスやイタリーへ汽車で旅行して遠く観ただけに過ぎないが、その

スケール
Scale 規模
寸法

スケールを小さくしたのが日本アルプスだと思ふ。しかも、日本アルプスの方が變化に富み、前者のやうに大味でなく、樹木の多いこと、溪谷や溪流の美しいことなどに於て遙かに優つてゐはしまいかと感ぜられる。日本アルプスは、岩石の露出はあるが、赭岩の生々しいのは少く、色は全體に於て赤か緑か黒で、到るところの雪溪や斑雪が、山の線や巖を見事な浮彫にして見せてくれる。

東海道を二度も飛びながら、機上からの富士を近くに見られなかつたのは遺憾であつたが、アルプスの上を飛ぶとき、雲表に女持の黒の扇子ほどの大きさに浮び出てゐるのを瞰た。それは眼前のアルプスの諸山の姿容と比べて、全然異國の山のやうにさへ思はれた。さうだ、日本アルプスの諸山を瞰た眼には、煙を

浅間山

長野縣信濃國の東境にある活火山

鈴鹿

三重縣伊勢國の西北境にある山

秩父

埼玉縣武藏國の西部にある連山

立川

東京府武藏國北多摩郡立川町陸軍飛行場の所在地

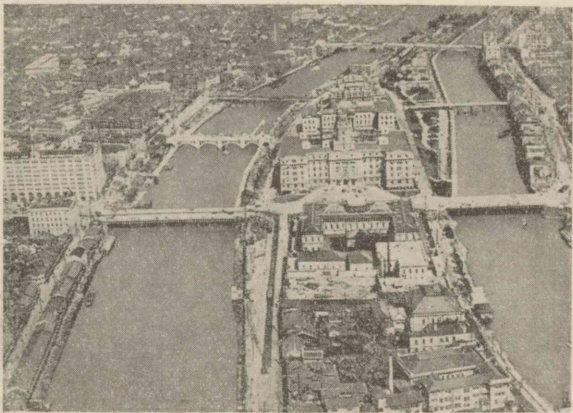
大觀

日本畫の大家
横山秀麿
日本美術院の主盟
明治元年水戸生

噴いてゐる浅間山ですら女性的である。たゞ浅間山の膚が赭黒く滑かて、そしてその線が大入道の肩のあたりを思はせるやうな、また點在する岩石が大入道の膚のいぼを思はせるやうな不氣味さを忘れることは出来ない。山脈では、僕の飛んだ範圍だけでは、鈴鹿と秩父とが優美である。立川から前橋市あたりを目がけて飛行すること二十分でもう秩父連山に續く山の波の上へ出る。それは大水盤の上へ何百尾かの鯉や鮒を放つたのかと思はれる形である。赭岩も土も雪も——夏の空であるから——一切なく、全連山は濃緑に包まれてゐるが、全體は淡青色或は淡黒色に塗りつぶされてゐる。正にこれ大觀の水墨繪である。大阪から東京への午後の歸途、鈴鹿に向つて行くと、行手に、見事

木下耶摩次
一等操縦士
東京朝日新聞社立川
飛行場長

フィルム
Film



大阪市の鳥瞰

な虹が懸つてゐた。鈴鹿は雨で、大阪灣上の陽がまともに映射してゐたのである。老巧で大膽な操縦家木下耶摩次君は、機を虹の真中目がけて進めた。やがて豫期した通り篠突く大粒の雨がびしりと機翼を打ちだした。その時真下を瞰ると、虹の兩脚が左右に垂れてゐた。鈴鹿はなだらかな緑の集合で、晴れた日にその上を低く通ると、機影が蜻蛉のやうな影が、この上なく面白い。

蘆の湖

箱根山上にある湖水

三島

靜岡縣伊豆國田方郡

三島町

赤人

奈良時代の歌聖

山部氏

その歌に「田子の浦

ゆうち出でて見れば

眞白にぞ富士の高嶺

に雪は降りける」

樗牛

文藝批評家

高山林次郎

文學博士

羽前國鶴岡生

明治三十五年歿

年三十二

生前興津三保邊の風

光を愛してゐた

廣重

江戸時代の浮世畫家

安藤氏

東海道五十三次の畫

を以て知られてゐる

安政五年(三五)歿

年六十二

箱根は蘆の湖を過ぎて、三島に抜ける時、湖水を圍む山の緑が幾十條も沼津や三島の平原めがけて駈足で降るやうに見えるのが目立つ。飛行機の上から眺めた箱根連山は格別印象的でもない。

七 日本山水の鳥瞰その二 鈴木文史朗

東海道を空の旅して眼を悦ばせるのは、名だたる海や灣や大河や湖水が錯綜連続して醸し出す風光の變化である。東京灣は數箇のお臺場で單調が破られてゐる。駿河灣においては、赤人の田子の浦も、樗牛の清見寺も、廣重の興津川も、二千米以上の上空からは全く存在がない。三保の松原なども、上から見ては、關西人の謂はゆるけつたいきはまる形に過ぎない。しかし駿河

Handwritten notes at the top of the page, including numbers like 17, 99, 17, 154, 210, 306, and a signature.

七浦 駿河灣の東部の浦々
 三津 静岡縣伊豆國田方郡
 内浦村三津
 伊豆の西北岸
 淡島 三津の西北の海中に
 ある小島

親不知 新潟縣越後國西境の
 難路
 直江津 新潟縣越後國中頸城
 郡直江津町

灣の中でも、沼津から、彎入した七浦や三津のあたり、殊にお椀を伏せたやうな淡島あたりの眺は、上から瞰ても、技巧の優れた日本畫を見るやうだ。

遠江灘や伊勢灣も、海岸傳ひに飛んで行けば、たゞ水の色、波の形のうるはしさに心を奪はれるだけである。これは太平洋沿岸に限らず、荒波で有名な日本海でもさうであるが、機が難航でないかぎり、日本の本土の海岸を飛ぶくらゐ安易な氣持を與へるものは恐らく他にあるまい。潮流の工合によつて、海の水が岸近くは青く、沖は碧に見え、風が吹けば、薄の穂のやうに、青海原に波頭が白く出揃ふ。

越後の親不知の斷崖から直江津にかけての海岸の俯瞰も、亦忘れ難いものの一つである。冬の日には知らず、このあたりの夏の

Grotesque
 グロテスク
 怪奇な
 奇異な



越後海岸の鳥瞰

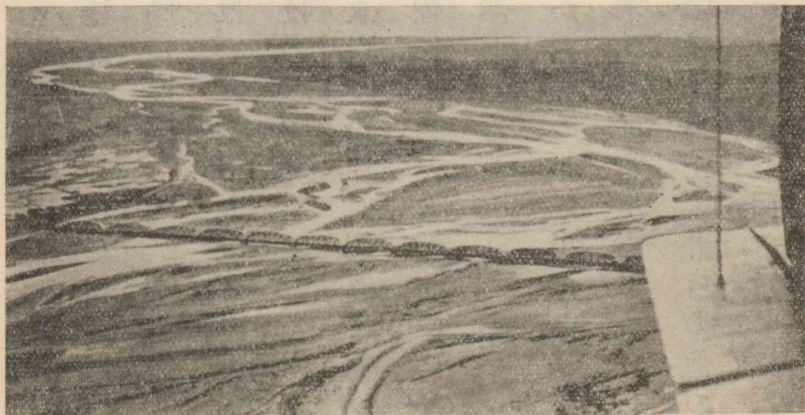
海は、さながら春の海といひたい程の穏かさで、海岸の屈折と斷崖との趣が、どの一片を切取つても、立派な風景畫だ。僕がこの邊を飛んだ日は、殊に靜かな朝であつたので、海面は油の如く平滑で、こゝでも機影が水鳥のやうに水面に映つた。沖には佐渡が島が水煙の中にぼんやりと浮んでゐた。

飛行機から僕の瞰た川の中で、東海道では、木曾川・天龍川その他二三の河流を除けば、富士・大井その他の大

河は、海近くなると實に美しいグロテスクな形相を示してゐる。

Ham
ハム
豚の股の肉の燻製したもの

河床は何尾かの鮫か平目がひつくり返つて腹を出したやうといはるか、或はその臟腑を出して捨てたやうといはるか、それともハムの切れを皿に盛つて出したやうといはるか、かういふ形容は、何れにしても綺麗ではないが、實際、飛行機から瞰た地上の景色の中で最も美しいものの一つである。殊に海岸に近い浅瀬の川になると、水の中の緑の藻が、海の縁に集團をなして生えてゐるのが、水瀬のせゝらぎでゆらくし



大井川の鳥瞰

濱名湖
静岡縣遠江國濱名郡の中央部にある湖
野尻湖
長野縣信濃國上水内郡にある湖

大津
滋賀縣大津市



野ある。湖の中、琵琶湖は優婉、濱名湖は明快、長野の野尻湖は一脈の凄みを持つてゐる。二千米くらゐの高度では、琵琶湖は二分の一も見えなかつた。此の大湖を取巻く諸山は女人群像とでもいひたいほど物やさしい。僕は、此の湖では、大津の街の湖岸にこぼれ落ちるやうに擴がつてゐる

景色の好きがすきだ。いかにも大湖が生んだ市街といふ姿である。

濱名湖は端から端までその上を飛んで、小半島・小灣・小入江が多くて、まるでバルカンの縮圖でも見るやうなのに興味を持った。海に接してゐる上に、平地であるせゐるか、どこまでも明るく、陽氣である。

野尻湖に芙蓉湖といふ別名のあることは、空から見てよく領かされた。この湖の日本海寄りに、黒姫・飯綱・妙高など一癖ありげな山が聳立してゐるのが、自然凄みを與へてゐるのだらうが、一つはその三十餘米もあるといふ水深のせゐもあるにちがひない。湖底にはこの湖水發生前の大森林がそのまゝ、白骨の林となつて、今でも天氣清澄の日には水面からのぞかれるといふが、僕の

バルカン
ヨーロッパ東南
端の半島

黒姫
飯綱
共に長野縣信濃國北
部の火山
妙高
新潟縣越後國西部の
火山

飛行した日は、生憎その附近が薄曇であつたので、それは見えなかつた。若し見えたら、何よりの觀物であつたらう。

(空の旅地の旅)

八 熊野落

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞召されんために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせたまひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上にて、迫りて、天地廣しといへども御身を隠さるべき處なし、日月明らかなりといへども長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に行みて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづくとても御心安かるべき處

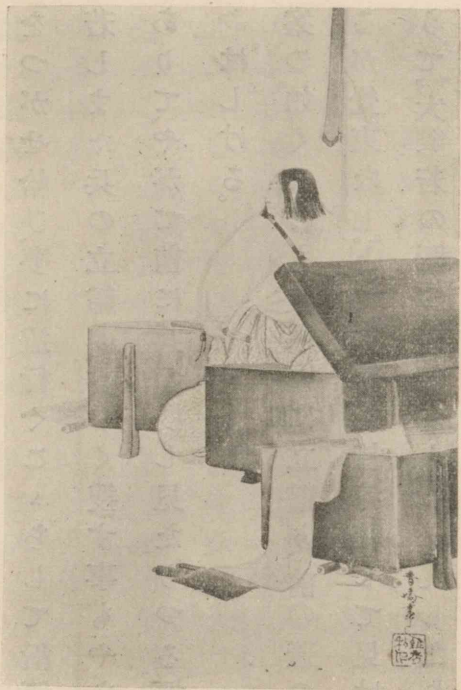
虎の尾を履む
心ノ憂危、虎尾ヲ踏
ミ春水ヲ涉ルガ若
シ。(書經)

一乘院
奈良興福寺の寺務門
跡

なかりければ、かくても暫しはと思召されける處に、一乘院の候人按察法眼好專、如何して聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。
折節、宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせたまふべき様もなかりける上、透間もなく兵已に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。「さらばよし、自害せん」と思召して、既に押肌脱がせたまひたりけるが、事叶はざらん期に、臨んで腹を切らんことはいと易かるべし。若しやと隠れて見ばや」と思召し返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋を明けず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して蓋をもせざりけり。此の蓋を明けたる櫃の中へ御身を縮めて臥させたまひ、其の上に

大般若
大般若經六百卷
唐の玄奘三藏の譯したるもの

御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。「若し搜し出されなば、やがて突立てん」と思召して、氷の如くなる刃を抜いて



般若寺の塔宮
谷口香嶠筆

御腹に差當て、兵「こゝにこそ」といはんずる一言を待たせたまひける御心中、推量るもなほ淺かる

べし。

さるほどに、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも残る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、是體の物こそ怪しけれ。

あの大般若の櫃を明けて見よ。とて、蓋したる櫃二つを明けて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。「蓋明けたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行くこゝちして猶櫃の中におはしけるが、若しまた兵の立歸り、委しく捜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に入替らせ給ひてぞおはしける。

案の如く兵ども復佛殿に立歸り、前の蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。とて、御經を皆打移して見けるが、からくくと打笑うて、大般若の櫃の中をよくく捜したれば、大塔宮は入らせ給はで、大唐の玄奘三藏こそ在しけれ。と戯れければ、兵皆一同に笑ひて門外へぞ出でてにける。「是、偏に摩利支天の冥應、又は十六善

摩利支天

陽儀と譯す
帝釋天の眷屬
武士の守本尊



十六善神
十六の護法の善神

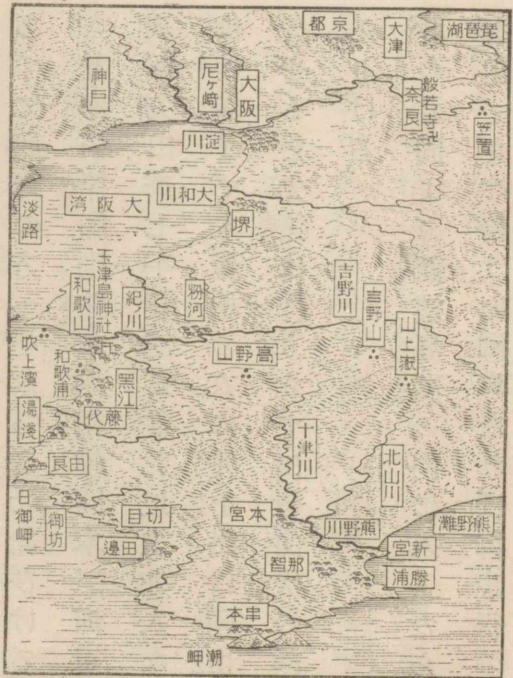
山伏姿



神の擁護による命なり。と、信心肝に銘じ、感涙御袖を沾せり。かくては、南都邊の御隠れがも叶ひ難ければ、即ち般若寺を御出あつて熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林房玄尊、赤松律師、則祐木寺相模、岡本三河房、武藏房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉つて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ざるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

此の君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々豫ては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いづ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮脚半草鞋を

めして、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。



や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月にみかける玉津島、光も今はさらでだに長汀曲浦の旅の路、心を碎く習

る先達も、見咎むることなかりけり。
由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫を附たえ、浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫

雨を含める

孤村ノ樹色残雨ニ昏ク、遠寺ノ鐘聲夕陽ヲ帯フ。

(唐の虚繪)

切目

和歌山縣紀伊國日高郡切目村

熊野三山

本宮

新宮

那智

兩所權現

本宮新宮をさす

伊弉諾伊弉册二尊の

權現といふ

なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。
其の夜は叢祠の露に御袖を片敷いて夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、びんづら結うたる童子一人来て、熊野三山の間は、尙も人の心不和にして大義成り難し。是より十津川の方へ御渡り候ひて、時の至らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者につけ進らせられて候へば、御道指南仕るべく候。と申すと御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけり。是權現の御告なりけりと憑しく思召されければ、未明に御悦の奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせたまひける。

山路

山路元ヨリ雨無ク、
空翠人ノ衣ヲ濕ス。
(唐の王維)

其の道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を欹たかてて苔の筵たたに袖を敷き、或は岩漏こる水に渴かわを忍んで朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劔に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身も草臥れ果てて、流るゝ汗水の如く、御足缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々も、其の身鐵石にあらざれば、皆飢疲うれてはかくしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川へぞ着かせ給ひける。(太平記)

九 忘れ難き日

姉崎嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かた。思へばはや五年の昔、春光麗かに南

姉崎嘲風

宗教學者
名は正治
文學博士
東京帝國大學教授
明治六年京都市生

友

高山樗牛

風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは恰も今日、此の日なりき。帽を振れる客巾を翻せる友、船上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消えうせぬ。「健在なれ、再び早く相見ん」との別れの言葉は尙耳に響き、最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りなき。嗚呼、かくて相別れたる我が友、今何處にかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎて清見瀉のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に凭りて無限の感に沈ましむ。

清見瀉

静岡縣庵原郡興津邊
一帯の海

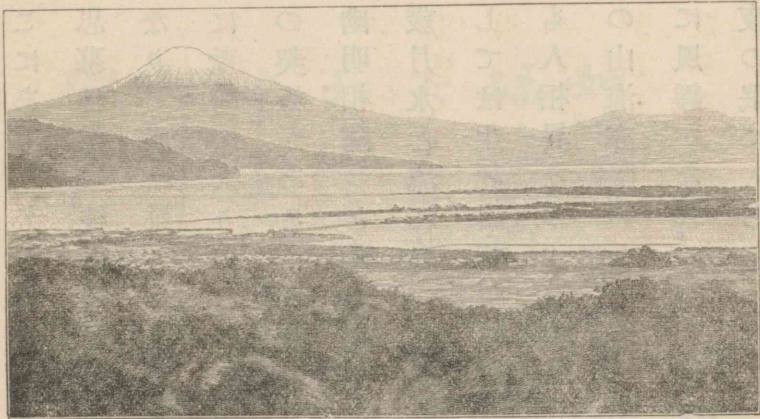
三月
明治三十三年
龍華寺附近



有渡の山
静岡縣安倍郡久能山
の別稱
袖師の松原
興津の西方海岸の松
原
埋骨の地
静岡縣清水市不二見
龍華寺

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を
踰えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて離別の悶を遣りた
りき。其の夜月明らかに星稀に、一灣の風光恍として夢の如
し。中宵欄に凭りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはか
なきを歎きぬ。

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残
し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有
渡の山、影かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨
の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せる
が如し。此の海、此の地、これ、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、
此の風光、彼が銷魂の種たりしこと幾たびぞ。山海舊の如く、風
光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼と其の姿とは今



龍華寺か見らた富士山

や尋ぬるに由なし。昨日は彼が
墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の
碑を撫で、今夜は五年前の今日の
別離を偲んで彼が遺文に對す。
嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の
友なくして如何にしてか憂懷を
遣らん。されど徒に憂ふるを已
めよ、人に百歳の齡なく、世に別離
なき人はあらじ。生死は世の常
なり、別離は却つて懷慕の樂しみ
を深からしめ、懷慕は時と處との
隔を越えて神相接せしむ。友こ

嗚呼云々
樗牛が嘲風に送つた
文の一句

ここにあり、悠久の夜亦ここにあり。彼が遺文餘薰新にして、我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭、今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲亦時に款晤に入り來る。「嗚呼平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。」身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴なはん。歲月水と流れ去つて、五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。(停雲集)

友

京都帝國大學教授文
學博士藤井健治郎

一〇 友に寄す

高山 樗牛

如何涕暮しなされ候や此方相愛らず
碌々羅在の間餘事ながら涕安心下され
たく候此頃ば事に終れ御無沙汰に
打過ぎ候毎度勝手の手のみ涕頼み
申上げ面倒 察入候徒然の折には
物ほきまゝ色々注文申之候へども實
際手にとるは稀に涕座候水彩畫にて

描きみんとて先頃繪具など取寄せ候
 へども是また手に觸れず候顧みれば我な
 がら侘しくも暮しつるものかなと思はれ候
 へどもその日はなかくに樂しく過し
 申候

小生の室は熱海中にて最も眺望よき處
 にて魚見崎より真鶴岬まで獲畔の裏
 に葦り候朝日影さし入る頃に起き出でて
 九時頃より濱邊などを散歩致し午後は

魚見崎
 静岡縣伊豆國田方郡
 熱海町の南端にある
 岬
 真鶴崎
 神奈川縣相模國足柄
 下郡にある岬
 熱海の東北十三軒

ハイネ
 Heine
 (1797—1856)
 獨逸の詩人

圍碁大弓等に費すが毎日の例に候時に
 は一卷のハイネ集を携へて山腹の芝原
 に仰臥し大海の浩蕩に對して朗吟する
 ことも御座候或は日暮の空ひとり磯邊の
 松に腰打懸けて夢ともなく現ともなき思
 に耽ることもあり候げにや自然の無盡
 藏なる今はた驚かるばかりに濟座候
 我も人も自然と口には言へ幾人か
 其の真意を會得したるや天の響地の

響思ひ見らだに高く深く俵へどもその感ず
 る人の心は如何ばかり高く深きものに候
 べきやうく夕日影も名残なく暮れ果てて
 渾火ほの見ゆる頃に相成候へばざんざくの
 波音のみ高く相成り水と空との別も消えて
 天地も一つになりたらんと思はるゝころ夜
 は眠のために造られたるものにあらずとの
 詩人の言葉の今更に思ひ出でられ候
 去年の暮より二三日前までは月色殊の外

笹川
 笹川種郎
 姉崎
 姉崎正治
 大橋
 大橋又太郎
 熊谷
 熊谷五郎

めでたくあかず夜をふかして打眺め申候
 元日の夜は十七夜なりしゆゑ月の海を出
 づる頃小生の宿に笹川姉崎大橋熊谷の
 諸氏と共に觀月の小宴を張り申候ひき
 一昨日の夜九時頃にて候ひけん林に
 就かんとてはからず窓の間より海邊をな
 がめ候へば缺月ながら一間ばかり海と離れ
 言ふばかりなくめでたき景色にて候ひしか
 ば下女に命じて兩戸をあけさせ欄に

よりてハイネを朗吟致候其時の心地よき
あはれわれこのまゝ石にも金にもなれかしと
思はれ候ひき

貴兄等はさぞかし日々清勉學の由事なら
んと羨まれ申候時には清文賜ひ候へか
し病氣も大方は宜しく候間心配下さ
るまゝく候申上げたき事山々これあ
り候へどもまづこれにて筆をとめ候

(樗牛全集)

高橋箒庵

元新聞記者

實業家

茶人

名は義雄

文久元年(三三)水戸
生

正徳

中御門天皇の御代

(三三—三三)

大江廣貞

水戸藩の史臣

彰考館總裁

伊藤仁齋の門人

享保八年(三三)歿

年五十八

肅公

徳川綱條

水戸第四代の藩主

一一 作文趣味

高橋 箒庵

文藝に關する趣味は極めて多端なる中に、作文趣味ほど高雅に
して、且深妙なる者はなからう。但し作文とは普通の文章に限
らず、漢詩・國風、其の他各種の散文・韻文を包含した稱呼である。
余は舊水戸藩士の家に生れたので、少年の頃より大日本史の編
纂に従事した鴻儒碩學の苦心談を傳聞する機會が多かつた。
而して彼等が記事又は翻譯に没頭して、一字一句にも心血を搾
り、研鑽討覈の末、始めて會心の文字を得た時の得意は、果して如
何であつたらう。正徳の頃、彰考館總裁であつた大江廣貞が、肅
公に代つて大日本史の序文を作つた時、彼が平生武藝を好んで
文筆に親しまなかつたので、館員一同竊かにこれを危ぶんだが、

安積澹泊

水戸藩の史臣

名は覺

彰考館總裁

朱舜水の門人

元文二年(三三〇)歿

年八十二

筆蹟

先人十八歳、伯夷ノ

傳ヲ讀ミ、蹶然トシ

テ其ノ高義ヲ慕フ有

リ。卷ヲ撫シテ歎ジ

テ曰ク、載籍アラズ

ンバ、虞夏ノ文得テ

見ルベカラズ。史筆

ニ由ラズンバ、...

賈島

唐の詩人

序成るに及んで、

先人十八歳、讀_ミ伯夷傳、蹶然有_リ慕_ル其高義。

と起し得て凜然、氣風霜を挟み、老學安積澹泊と雖も猶後に隴若

たらざるを得なかつたので、皆

其の大手筆に駭服したさうだ

が、大江が「先人十八歳云々」の起

筆を思ひ得た時の心境は、蓋し

手の舞ひ足の踏む所を知らざ

る程であつたらう。何事によ

らず苦しんだ舉句出來上つた者は其の成績が面白く、古人が「愈

窮而後工」と言つたのも、亦此の極致を道破した者であらう。唐

の賈島が、

大日本史叙
先人十八歳讀伯夷傳
蹶然有慕其高義撫卷
歎曰不有載籍虞夏之
文不可得而見不由史

鳥宿池中樹 僧敲月下門

の二句を得たる時、敲と推との取捨に思ひ迷うて慘澹たる苦心を費した挿話が推敲なる二字の出典となつたのも、本朝の都良香が月夜羅城門を過ぎ、所作の一聯、

氣霽風梳新柳髮 氷消浪洗舊苔鬚

と吟じた時、鬼神が樓上より嘆賞の聲を發したといふ傳説があるのも、亦皆作文に對する熱狂的趣味を表現した者であらう。總じて文學極盛の時には、文人韻士相競うて名譽の佳作を得んと欲し、非常の眞劍味を以て嘔血苦心を費す其の結果として、古今の秀句が出て來るのである。平安朝時代などには、作者の意氣込も並々ならず、歌合に失敗して憂心忡々疾を成す者があれば、彼の「秋風ぞ吹く白河の關」の一句を有意義にせんとして、兒戲

都良香

平安朝時代の儒者

元慶三年(五九七)卒

年三十六

秋風ぞ吹く

都をば霞と共にたち

しかど秋風ぞ吹く白

河の關(能因法師)

鳴立つ澤

心なき身にもあはれ
は知られけりしぎた
つきはの秋の夕暮

(西行法師)

千載集

勅撰集の一

藤原俊成が後白河法
皇の院宣によつて撰
進したもの

藤原俊成

歌人

千載集の撰者

元久元年(八六四)薨

年九十一

定家

歌人

新古今集新勅撰集の

撰者

仁治二年(九〇一)薨

年八十

に類する旅行の状を装うた者もあり、妻子珍寶を弊履の如く棄
去つた西行法師ですら、鳴立つ澤の一首が千載集に載せられた
るや否やを氣遣つて、關東よりわざ／＼上洛の途中、其の選に洩
れたと聞いて、す／＼引返したといふ逸話もあつて、當時文藝
家の間に作文趣味が如何に濃厚であつたかを窺ふに足る。此
の外藤原俊成が平居和歌を作るに古淨衣を着、桐火桶を抱き、凝
然靜坐して嘗て情容を示さなかつたので、其の歌も亦雅淡深遠
の態があつたと言傳へられ、其の子の定家は室の南面を洞開し
て襟を整へて端坐し、平常至尊の前にあるが如くにしたので、其
の歌も亦氣格が高妙であつたといふ事など、當時の作家が何れ
も文字を以て生命となし、平常これに對する用心の極めて深切
なりし態度を觀るべきものであらう。

元祿七年

東山天皇の御代

將軍綱吉の時(三五四)

去來

俳人

蕉門十哲の一

向井氏

寶永元年(三三四)歿

年五十四

降つて徳川時代文運勃興の際に於
ても、各方面の文人韻士が其の錦心
繡腸を搾り盡くして前人未發の名
句を得んと努力した事は藤原時代
に劣らぬが、彼の十七字の俳句が平
民文學として天下に横流してより、
其の字數の少きだけそれだけ却つ
て多くの洗煉を要する譯で、俳人者
流が一字一句にも死力を盡くした
苦心談は枚擧に遑がない。芭蕉が
元祿七年十月六日即ち臨終の六日
前、枕頭に侍した去來に向つて、我が



藤原定家
下村觀山筆

野明
蕉門の俳人
大堰川
山城國桂川の上流
清瀧
大堰川の上流
園女
俳人
號は智鏡
岡西惟中の妻
芭蕉の門人
享保十一年(一八〇〇)歿
年七十四
古池や
古池や蛙飛びこむ水
の音
枯枝に
枯枝に鳥のとまりけ
り秋の暮
夏草や
夏草やつはものども
が夢のあと
塚も動け
塚も動けわが泣く聲
は秋の風
小出祭
歌人

曩に野明に示した「大堰川波に塵なし夏の月」と、清瀧で詠んだ「清瀧や波にちりこむ青松葉」と、園女に贈った「白菊の目にたてて見る塵もなし」の三句は意匠の相類する嫌あれば、前二句を廢して白菊の一句のみを留むべきか、汝の意如何。と問はれたので、去來は師翁が名のため道のため死に至るまで一二句の取捨をも忽せにせざりし其の執心の深切なるを思うて、感涙袂を濕したといふ美談があるが、此の一事に依つて推想するに、芭蕉が「古池や」枯枝に「夏草や」塚も動け等の名句を得た時の興趣は果して如何。孤獨なる彼の一生も、此の趣味あるに依つて非常に幸福であつたらうと思ふ。

明治時代に於て最も作文趣味に富んだ一人は、我が師小出祭翁である。翁は天才肌の歌人で、和歌は難題ほど却つて詠みよい

號は福園
御歌所寄人
明治四十二年卒
年七十六

山縣含雪公
名は有朋
元帥
陸軍大將
内閣總理大臣
樞密院議長
公爵
大正十一年歿
年八十五
常磐會
山縣公をはじめ若干
の同志で設けた歌の
會

ものだ。といひ、又人には自然の歌口うたぐちがある。今若し同一の歌百首中より一首の歌口をも見出さざれば、其の人には最早歌を詠ませぬがよい。と言はれたが、其の代り弟子に秀吟が出来た時には、非常に喜んでこれを稱揚する風があつた。或時、人のために螢を詠じた自作の詩を揮毫して、誤つて光の一字を脱落するや、翁は一考の後、傍に

なほざりにかきけちたりと思ひしは光かくして飛ぶ螢
なり

と一首の和歌を書添へたので、却つて面白き一幅となつた事があつた。

又同じころの素人側で作文趣味に富んだ一人は、山縣含雪公であらう。或年余が自身の雅號に因み、常磐會より箒といへる課

題を出して貰つた時、公の出詠なる、

たまさかに朝ぎよめする少女子が持てる箒の重げなる

かな

といふのが満點になつたと聞くや、平常謹嚴そのものの如くなる公は、廊下に飛出して貞子夫人を呼び、満點だ〜。と子供の如く打喜ばれたといふ事だが、平常和歌を尊重した公の氣分より推想すれば、彼の越後口の戦陣で

仇まもる岩いわのかぶり影ふけて夏も身にしむ越こしの山風

の名歌を得た時の喜は、或は當時の苦戦に打勝つた満足よりも更に遙かに大きかつたかも知らぬ。

明治時代の小説家では、尾崎紅葉が最も作文趣味に富んでゐた人であつた。本邦百貨店の魁ともいふべき三越を余が店員と

越後口の戦陣
明治元年征東大總督に隨つて北陸道方面に向つた戦

尾崎紅葉
明治時代の小説家
伴人
名は徳太郎
明治三十六年歿
年三十七

して始めて經營した時、同店より發行した花衣といへる雑誌の編輯に紅葉を頼んだことがあつた。其の頃紅葉は彼の「金色夜叉」の執筆中であつたらしく、自分は晝間家庭の紛雜を厭ひ、午前

二時より起出でて執筆するのを常

尾とするが、此の非衛生的習慣の結果

時遂に不治の胃病を醸し、御覽のとは

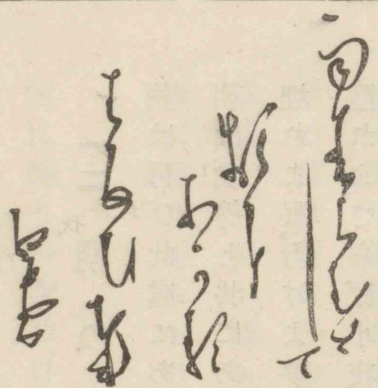
紅り血色がはなはだ勝れない次第で

兼あると言つた。其の面貌を熟視す

筆れば、險の下に青黒い斑點を現じて、

病魔の深く膏盲に入つてゐる有様

まことに氣の毒に堪へなかつた。しかし彼が深更幽窓の下に坐して、熱海の月夜に間貫一が口走つた彼の名文句を綴り了つ



筆蹟

雨來らむとして頻にあがるはなび哉

紅葉

膏盲

膏は心臓の下の微脂盲は横膈の上の薄脂針や薬のとどかぬ處

間貫一

「金色夜叉」の主人公

たときの愉快を想像すれば、彼の短生涯に於て満喫した作文趣味の分量は、蓋し何人よりも豊饒であつたらうと思ふ。

(藍峰先生知友新稿)

島崎藤村

詩人
文學者
明治五年長野縣木曾生

一二 朝の歌

島崎藤村

朝は再び此處にあり、
朝は我等と共にあり。
埋れよ眠、行けよ夢、
隠れよ、さらば小夜嵐。

諸羽うち振る雞は、
咽喉の笛を吹鳴らし、

けふの命の戦闘の
よそほひせよと叫ぶかな。

野に出でよ、野に出でよ、
稲の穂は黄にみのりたり。
草鞋とく結へ、鎌も取れ、
風に嘶く馬もやれ。

雲に鞭うつ空の日は、
語らず、言はず、聲なきも、
人を勵ますその音は、
野山に谷に溢れたり。

流るゝ汗と膩あぶらとの
落つるやいづこかの野邊に、
名もなき賤のものゝふを
來りて護れ、軍神。

野に出でよ、野に出でよ。

稻の穂は黄にみのりたり。

草鞋とく結へ、鎌も取れ。

風に嘶く馬もやれ。

あゝ綾絹につゝまれて、
爲す由もなく寝ぬるより、

薄き檻ついで樓は纏ふとも、

活きて起つこそをかしけれ。

口には朝の息を吹き、

骨には若き血を纏ひ、

胸には誇、手に力、

霜葉を踏みて疾く來れ。

野に出でよ、野に出でよ。

稻の穂は黄にみのりたり。

草鞋とく結へ、鎌も取れ。

風に嘶く馬もやれ。 藤村詩集

一三 落穂拾ひ

廣い農場は今刈入れの最中である。金色に稔つた小麥が刈りとられてゆくと、男や女、すべての農夫たちが、たえず忙しさにそれを集めてゆく。一方では、それを束ねる農夫たちが、瞬くうちに小麥の束をこしらへてゆく。その束は、四輪馬車にうづたかく積込まれて、農場近くの納屋へと運ばれてゆく。そこには刻々に小麥の山が築かれてゆく。眼を轉ずると、農場のほるか彼方を、馬に乗つた監督がかけまはりながら、農夫たちに指圖をしてゐるのが見える。

さうしてゐるうちに、落穂拾ひの人たちが農場に現れて、そこら一面にまき散らされてゐる小麥の落穂を拾ひあつめにかゝる



筆 - レ ミ

ひ 拾 穂 落

ヘブライ人

上古ユーフラテ

ス河を渡つてパ

レストアインに移

住したアブラハ

ムの後裔

特にイスラエル

人をいふ

Hebrews

のである。この習慣は、ずっと昔からあるもので、誰がこの落穂を拾ひに來ても、農場では別に抗議を申し出るやうなこともなく、公然の一つの仕事となつてゐる。これに關しては、古のヘブライ人の間に、一つの嚴肅な宗教的の解釋がある。「汝が、汝の農場の收穫をする時には、落穂拾ひの人たちを厄介拂ひしてはならないばかりでなく、さういふ人たちに、自由に落穂を恵まなくてはならぬ。貧しき人々や旅人の群に落穂を與へることは、汝等の一つの義務である。」又、これに關して更に他の解釋がある。「落穂拾ひは孤兒や寡婦のために。さすれば、主なる汝の神は、汝のすべての仕事の上に祝福を垂れるであらう。」かうした風習は、今も尙フランスに遺つてゐて、小麥畑の所有主は、自分の農場の刈入れあとの落穂拾ひを若し拒絶するやうな

ことがあれば、必ず凶作に逢ふといふことを信じきつてゐる。こゝに面白いことは、落穂拾ひの人たちは、永い間の習慣上の訓練から、白晝に限つて小麥の穂を拾つては歩くが、夜陰に乗じて小麥の束をそのまま、盗み出すやうな不正直者を、未だ曾てその仲間から出したことはないといはれてゐる。

夏の晝近くである。太陽は照輝いてゐる、落穂拾ひの足もとの影が短い。この落穂拾ひは、三人の貧しい百姓の女たちである。彼女たちは、お粗末ではあるが、仕事着をきちんと身につけ、頭巾で髪を包んでゐる。額の影は、眼のふちを隈どつてゐる、着物の襟は頸のあたりで手頃にくりぬかれて、風通しがよささうに見える。

かうした扮装をした彼女たちは、針のやうに鋭い刈株のあとを踏んで、貴い小麥の穂を集めながら、あちらこちらと歩を移すのである。絶えざる努力に依つて拾ひ集められた落穂は、いくつもの小さい束となり、次々に足もとに積重ねられてゆく。

私たちは、この三人の農婦たちを、更にこまかく観察してみることも面白いとおもふ。彼女たちは、娘・母親・老婆と、それぞれに年が違つてゐるのを見出す。一番近く右側に中腰に立つてゐる女が、三人のうちでは年長者であることがわかる。老婆は長い間立續けてゐることが堪へられないと見える、恐らく腰もこはばつてゐるのであらう、如何にも仕事を續けてゆくのが大儀さうに見える。その次の中央の農婦は、如何にも岩乗さうなからだつきで、がつしりとした物腰には、重い荷物でも平氣で背負ふだけのゆとりが見える。その太い丈夫な腕は、どんなきつ

ケープ

Cape
肩マント

エプロン

Apron
前懸

い仕事でも成しとげられさうである。三番目の、左側の若い農婦は、きはめてしなやかな風情があつて、どう見ても娘々してゐる。顔かたちから、頭巾の恰好、輝く太陽の光をさけてゐる頸すぢの小さなケープなどから見ても、娘らしい情味がある。二人の年かさの農婦はエプロンの端を折曲げて、それに一々落穂を入れてゐるが、この娘は他の二人のやうにエプロンをつけてゐないで、拾ひ集めた落穂は、皆これを手に握つてゐる。更に、私たちは、この三人のそれ／＼の動作に眼を移すと、三人が三人とも如何にちがつた動き方をしてゐるかが容易にわかるであらう。エプロンの中に拾ひ集めてゐる二人は、握りしめた小麥の穂をもつた左手を一々その膝のあたりに休めて、進みながらも絶えずこの不器用な動作をくりかへしてゐる。娘の落

アウトライン
Outline

穂拾ひは、極めて敏捷に、右手で拾つた麥穂を左手に、そしてその左手は、これを背の上に移して休めてゆく。この動作は徒にからだを疲らせることがなく、しかも極めて美しい姿である。かうして大地を見つめながら、前進しては止り、止つては前進してゆく落穂拾ひの人たちを見ると、恰も野原を不規則に飛移つてゆく大きな蝗のやうでもある。この三人の農婦の姿を見てゐると、皆が私たちの方へ今にも動き出して來はしないかと思はれるほどである。

この繪は誠に線に於て美しい出來榮えを示してゐる。中央の農婦はぎごちない輪郭から成立つてゐる。この生硬な線は、胸部から右手の角度の線にあらはれ、更に頸と頸との角度にも、髪を包む頭巾のうしろの線にもあらはれてゐる。私たちはかう

した強い線に依つて描き出された中年の農婦その人の持味の
不趣味さをさへ感じさせられるのである。これに反して、若い
農婦は美しい曲線で描かれてゐる。胸の線と背中の線とが互
に快い圓味を見せて楕圓形を形づくり、それが左手の線に依つ
て、より完全な効果をあげ、更にさし延べられた右手の線が、背中
の線と延びつゞいて、美しい線を見せてゐる。その他、可愛らし
い咽喉の曲線、手の整調、頭巾の恰好よさなど、すべて處女の姿の
つゝまじさをもつてゐる。

年老いた農婦の立像を描く線は、他の二人の農婦の方へ曲線を
なしてゐるが、構圖の上から見て、この線の示す高さは、小麥の積
上げられた山の形とはちがつた効果で、畫面全體のいゝしめく
くりをなしてゐる。小麥の堆積の山は遙か彼方の野面の中央

に見えるが、その小麥の山の頂の線が、腰を屈めた二人の農婦の
背中の線と調和を保つてゐることも、注意しなければならぬ技
巧であらう。

私たちは、この繪を他の作品と比較するとき、同じやうな構圖
を見出すであらう——前景に人物を置き、遠景に地平線を描く
といふやうな場合の構圖がそれである。しかし、私たちは、この
繪に於て、落穂拾ひの背景をなす遠景の如何に微に入り細に入
つた描寫であるかに氣付くはずである。

この繪は、「晩鐘」と同じやうに、ミレーの作品のうちでも、最もよく
知られてゐる傑作のうちの一つで、一千八百五十七年に始めて
サロンに展覽されたものである。現在はルーヴル美術博物館
に所藏されてゐる。(世界名畫物語)

バック
ミレー
Back
Millet
(1814—1874)
佛國の畫家
農人の生活を
よく描いた
サロン
パリに開く美術
Saloon
展覽會
ルーヴル美術博物館
Louvre
博物館
パリにある美術

萌黄匂

上は濃い萌黄色で下へいくほど白くぼかした緋の色

鍬形

兜の前立物の名

黄金作

つかやさやを黄金で裝飾したものを

切斑

鷹の羽の中は白く上は黒いもの

滋籐の弓

五分(一種半)おきに一寸(三種)幅に籐をまいた弓

連錢蘆毛

蘆毛に灰色の圓い錢をならべたやうな斑のある馬の毛色

金覆輪

黄金でふちをとつたもの

五六段

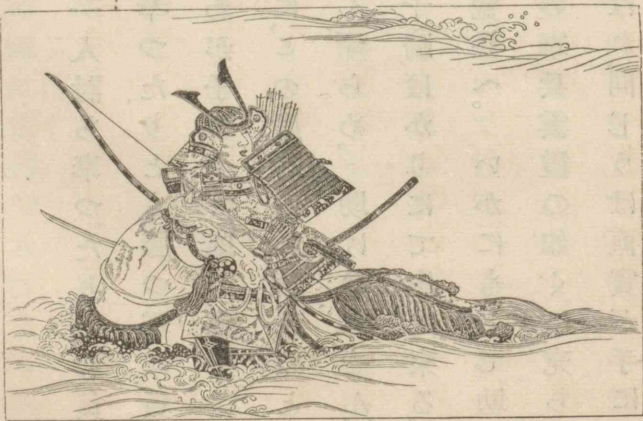
一段は六間(十一米)位か

一四 小枝の笛

さる程に一谷の軍破れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家の公達の助船に乗らんとて、汀の方へや落ちゆき給ふらん、あつぱれよき大將軍に組まばやと思ひ、細路に懸つて渚の方へ歩まする處に、茲に練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、黄金作の太刀を佩き、二十四さいたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗つたりける武者一騎、沖なる船に目をかけ、海へさつと打入れ、五六段ばかりぞ泳がせける。熊谷あれはいかに。よき大將軍とこそ見まゐらせて候へ。まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へ、返させ給へ。」と扇をあげて招きければ、招かれて

小次郎
直實の長子直家

取つて返し、渚に打上らんとし給ふところに、熊谷浪打際にて押並べ、むずと組んで、どうと落ち、取つて抑へて首をかゝんとて兜をおしのけて見たりければ、薄化粧して鐵漿黒なり。わが子の小次郎が齡ほどして、十六七ばかりなるが、容顔まことに美麗なり。「抑、いかなる人にて渡らせ給ひ候やらん、名告らせ給へ。助けまゐらせん。」と申しければ、まづかういふ和殿は誰ぞ。「物その數にては候はねども、武藏國の住人熊谷次郎直實。」と名告り申す。「さては汝



平野 矢三郎 盛衛 筆

がためには好い敵ぞ。名告らずとも、首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ」と宣ひける。

熊谷「あつばれ大將軍や。この人一人討ち奉つたりとも、負くべき軍に勝つべき様なし。又助け奉つたりとも、勝つ軍に負くることよもあらじ。今朝一谷にて、わが子の小次郎が薄手負うたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲しみ給はんずらめ。助け參らせん」とて、後を顧みたりければ、土肥、梶原、五十騎ばかりにて出て来る。熊谷涙をはらくと流いて、あれ御覽候へ。いかにもして助けまゐらせんとは存じ候へども、身方の軍兵雲霞の如くに充ち満ちて、よも遁しまゐらせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかかけ奉つて、後の御供養をも仕り候はん」と申しければ、たゞ如何様に

土肥
次郎實平
梶原
平三景時

も、とう／＼首を取れ」とぞ宣ひける。

熊谷「あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず。目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く／＼首をぞ搔いてける。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに只今かゝる憂目をば見るべき。情なうも討ち奉つたるものかな」と、袖を顔に押當てて、さめ／＼とぞ泣きゐたる。

首を包まんとて、鎧直垂を解いて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あないとほし、この曉、城の内にて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時身方に東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらじ。上臈はなほも優しかりけるものを」とて、これを取つて大將軍の

大將軍
源義經

經盛
平忠盛の子
清盛の弟

霜月

正平二年(1099)十一

月

この時楠木正行は山名時氏を攻めてこれを打破つた
細川顯氏も亦續いて敗走した

阿部野

攝津國天王寺より住吉までの野

今は大阪市内

渡邊の橋

今の大阪市天満橋と天神橋との間にあつたといふ

御見参に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて生年十七にぞなられける。これよりしてこそ熊谷が發心の心は出て來にけれ。件の笛は祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より下し賜はられたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによつて持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。(平家物語)

一五 如意輪堂

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱替

四條繩手

大阪府河内國北河内郡四條村

兩度の合戦

河内國譽田林の戦と攝津國阿部野の戦

將軍

足利尊氏

左兵衛督

足利直義

淀

京都府山城國久世郡淀町

八幡

淀川の左岸にある

同國綴喜郡八幡町

淀川の左岸にある

へさせて身を温め、藥を與へて創を療せしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感じる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その情を報ぜんとする人は、聽て彼の手に屬して、四條繩手の合戦に討死をぞしける。さて今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢などを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く、淀八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍

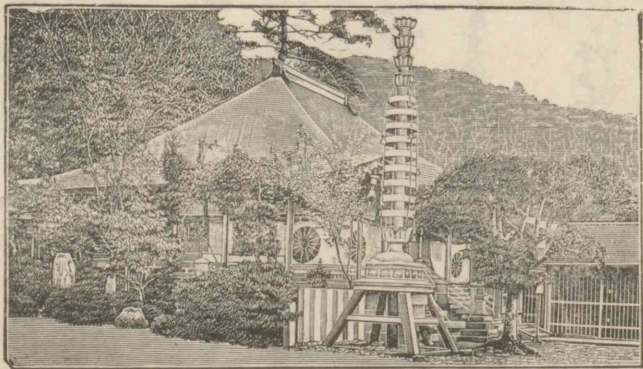
先朝
後醍醐天皇

討死
延元元年（九六）五月
十七日

有待の身
凡夫無常の身

弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に参じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成厄弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戦の場へは伴なはて河内へ歸し、死残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に即け参らせよ。と申し置きて死にて候。然るに正行、正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎く合戦を仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落ちぬと覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲

には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡くし合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取られ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に参内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。主上すなはち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔ことに麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以



如意輪堂

筆蹟

鎮守社壇回祿ノ事、殊ニ以テ驚歎シ入り候。但シ神體焼失セズ火中ニ御座候條、未代ノ奇瑞、言語道斷ニ候ハン歟。急ギテ奏聞ヲ經可ク候。恐々謹言。
五月二十六日
正行花押
觀心寺々僧御中

前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしめ、叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神妙なり。大敵今勢をつくいて向ふなれば、今度の合戦は天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦命を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知つて進むは時を失はじが爲なり、退くべきを見て退くは後を全うせん爲なり。朕汝を

鎮守社壇回祿事候ハ
終始入レ但祿碎石焼
失火中御座候條
奇瑞ノ語道斷ニ
候ハン歟
急ギテ奏聞
ヲ經可ク候
恐々謹言

楠史 木微 正墨 行寶 筆

以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地に付け、とかくの勅答に及ばず、只之を最後の参内なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各、名字を過去帳に書きつらねて、その奥に

かへらじとかねて思へば、梓弓なき數にいる名をぞとむる

と、一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各、鬢髪を切りて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。(太平記)

一六 月の夜さむ

題しらず

後醍醐天皇御製

わすれめやよるべもなみの荒磯を御船のうへにとめし心
は

元弘三年
後醍醐天皇の御代
(一九五)
源長年
名和長年
船上山
鳥取縣東伯郡に峙つ
山

この御製は元弘三年隱岐國より忍びて出でさせ給
ひける時源長年御迎へに参りて船上山といふ處へ
なし奉りける程の忠例なかりし事など記しおかせ
ましましけるものの奥に書添へさせ給ひけるとぞ
元弘三年九月十三日三首の歌講ぜられし時月前擣衣
といふことを

聞きわびぬはつき長月ながき夜の月の夜さむにころも
う
つ聲

爲定

藤原氏
歌人
新千載集の撰者

百首の歌よませ給ひて前大納言爲定の許へ遣はされ
ける中に
後村上天皇御製

あはれはや浪をさまりて和歌の浦にみがける玉をひろふ
世もがな

吉野の行宮にて人々に千首の歌めされし序に山花と
いふ事をよませ給ひける
長慶天皇御製

わが宿とたのまずながら吉野山はなになれぬる春もい
くとせ

土佐國にて百首の歌よみ侍りける中に海邊霞を

中務卿尊良親王

春霞かすむなみぢはへだつともたよりしらせよ八重の潮
風

尊良親王
後醍醐天皇の第一皇
子
延元二年(一九七)越前
金ヶ崎城で御自害
土佐國
元弘二年(一九三)北條
氏の爲に土佐國幡多
に流され給ひ翌年御
歸京

宗良親王
後醍醐天皇の皇子
新葉集の撰者

籠手指原
埼玉縣武藏國入間郡
所澤町の西四軒

新待賢門院
後醍醐天皇の中宮藤
原康子

東の方に久しく侍りてひたすら武士の道にのみたづ
さはりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも思の外な
るやうに覺えてよみ侍りし 中務卿宗良親王
おもひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむも
のとは

同じ頃武藏國へうち越えて籠手指原といふ處におり
ゐて手分などし侍りし時いさみあるべきよしつはも
のどもに仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし
君のため世のためなにか惜しからむ捨ててかひあるいの
ちなりせば

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春花を見てよ
ませ給ひける
新待賢門院

文貞公

藤原師賢
吉野朝の忠臣
大納言
延元二年(九九七)薨
年三十二

上田敏
文學博士
號は柳村
京都帝國大學教授
英文學者
東京生
大正五年卒
年四十三

時しらぬなげきのもとに如何にしてかはらぬ色に花の咲
くらむ

元弘元年八月俄に比叡山に行幸なりぬとて彼の山に
登りたりけるに湖上の有明殊におもしろく侍りけれ

ば
文貞公

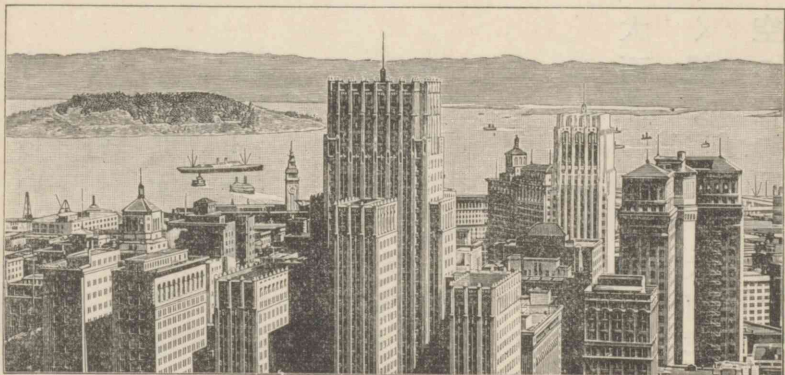
おもふことなくぞ見ましほのくくと有明の月の志賀の
うら波
(新葉和歌集)

一七 世界の歌枕 上田敏

大西洋の浪は、太平洋のとは稍違つてゐる。太平洋の浪は大き
く緩く打つ。大西洋のはいつも天氣が悪い爲か、稍小さく鋭い。
空の色の關係もあらう、其の色は澄んだ藍ではなくて、稍黒ずん

桑港

San Francisco
サンフランシスコ
米國太平洋岸の大港



桑港

だ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度が稍高くなるに随つて、浪の色が淡く、入日の華やかさは異ならぬが、夕雲の色彩も稍あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却つて美しい。

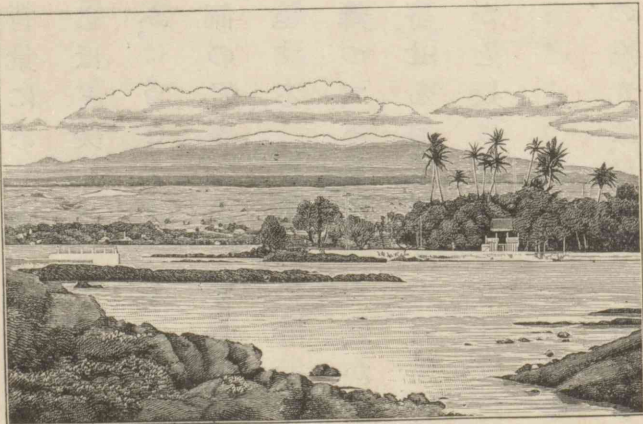
私の大浪に遭つたのは、桑港に着く三日程前の一日であつた。小山の如き浪が寄せ返るので、さしもの大船も木の葉のやうに動揺したが、幸にも此の日は頗る上天氣で、風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味はふことが

布哇

Hawaii
太平洋北部の群島

出來た。大西洋の方は一體に山なす巨浪は少いが、米國を去つて六日目位に、暴風雨に類した天氣に出遭つて、ひどく苦しめられた。要するに、海の景色は取出でて人に語るといふことは難いが、後日に追想すると、單調のやうでも、其の美は千變萬化である。これ實に究竟の歌枕である。

陸上の景色は、土地によつて著しい相違があつて、一概には言盡くされぬ。布哇の如き、四時氣候を同じうして太平洋の樂園と稱せらるゝ地に行くと、満目の風光一變し



布哇風景

金門灣
 The Golden Gate
桑港と太平洋と
 を結びつける海
 峽
 幅三軒ほど

て、始めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萌黄の色に見えて、それに椰子の林が背景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも、實際の方がよほど美しい。これからの人が、歌枕の一つとすべき處だと思ふ。カピオラニの公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の梢に放し飼の孔雀が止つてゐて、其の艶な羽毛が花の様であつたのを記憶する。又桑港の港近くなつた海上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる處から遙かに眺めると、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有様は、水の屏風を立廻したごとく、海の上にも瀧があるかと疑はれた。これはた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。

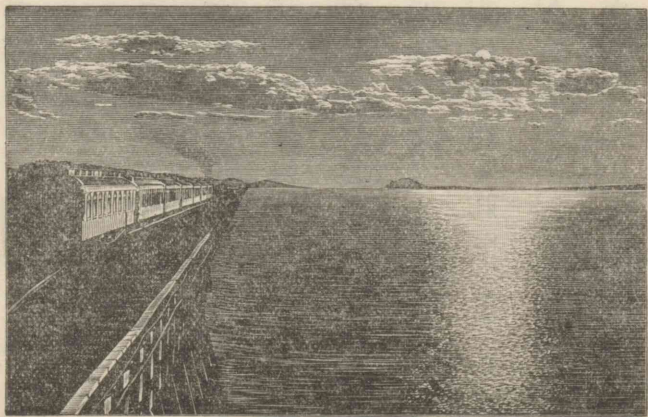
熱帶地方は言ふまでも無いが、歐米の風光は、日本に比していたく趣を異にしてゐる。彼の國には、我が國よりも、草木が少い。

見る山も、日本のやうに松杉が山全體を蔽うてはゐない。或は芝山の如く、或はたゞ岩石のみのやうな山の處々に、たまたま青々とした草木が十數本繁つてゐるといふ風の景色が多い。それで日本人は、動もすれば我が國の景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍、偏した見方であつて、兩方共にそれの美しさがある。併しながら、その土地の極めて確であるのは、勿論景色が好いとは謂はれない。私の通過した米國の一部分は、殊に冬枯の候であつたから、人げのない、ものさびしい廣漠の野を行く心地がした。概して、あちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離れた數尺の處から、四方に向つて枝が規則正しく手をひろげてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振はいかにも風趣が乏しいやうに思はれるが、實際はさうで

ワイオミング
米國の西部にあ
る州の名

ソルト、レーク
米國の北部ユタ
州にある湖

ない。
さてアメリカの歌枕を挙げれば、ま
づワイオミングの平原であらう。
眼の届くかぎり一物もなく、雪がち
らちら降つてゐる中を、たまに羊の
群が鐵道線路のあたりをさまよふ
などは、優美の觀には缺けてゐるが、
一種壯大の趣がある。名にし負ふ
ソルト、レークの鹽の湖を横斷する
中央太平洋鐵道の長路を通ると、平
原の間に丘陵が起伏して、雪斑の岩
角に朝日の反射する景色、これ亦十分に歌枕たるの價值がある。



ソルト、レークを横斷する中央太平洋鐵道

コロラド
米國の西部にあ
る州の名

キャニオン
コロラド河の峽
谷

ニューヨーク
米國ニューヨーク
州の大都市

ブルックリン
ニューヨーク市
の一部

摩天閣
Skyscraper

又コロラドの北、所謂キャニオンの一部は、奇岩怪石が路傍に轉
つて、さながらの鬼斧神工と思はれる。此の景も歌枕に逸すべ
からざるものである。
さて此の歌枕といふ詞は、もう少し意味を廣くして見たいと思



摩天閣

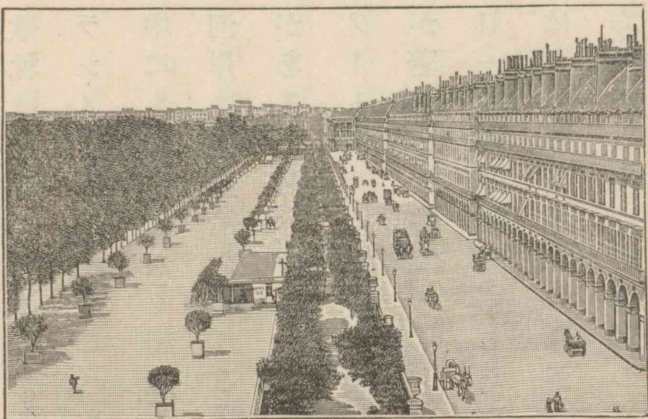
ふ。即ち山水の風景ばか
りに止めず、進んで紅塵萬
丈の市街、煤煙の立昇る工
場の光景なども詩歌に寫
し出して面白いと思ふ。
例へば、ニューヨークの摩
天閣なども、其の或物は建築美を持つてゐないが、中には一種の
新しい趣味の徹底してゐるものがある。ブルックリンの釣橋

ホバーケン ハドソン河を隔ててニューヨーク市と相望む都
 マヂソン ニューヨークのマヂソン公園に接した大通
 Madison マヂソン公園に接した大通
 バレルオルガン 手風琴
 Barrel-organ 手風琴
 ウォールストリート ニューヨーク株式取引所の所在地
 Wallstreet ニューヨーク株式取引所の所在地

の上からニューヨークを望むと、建てつらねた大廈高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は二十階三十階の窓の燈が、空の星かときらめいて輝く。又ホバーケンの港口など、朝霞の匂、夕暮の色、他國に無い趣味がある。更に進んで人情・風俗を加へて景色を見ると、愈、好箇の歌枕がある。

ニューヨークはマヂソンの大通、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、イタリーの移民が弾く哀なバレルオルガンの聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實の音楽かとも聞える。またはウォールストリートの執務時間に其の邊を通ると、黄金の爲に萬人が血眼になつて狂ふ様は、賭博場を見るよりも猶慘澹たる感じを與へる。又、これとは反對に、冬の田舎に入つて見ると、葉の落ち盡くした楓樹の並木路を、雪を蹴つて小學

ニューイングランド 米國の東部地方
 New England 米國の東部地方
 パリ フランス國の首府
 Paris フランス國の首府
 シャンゼリゼー
 Champs Elysses
 長安 陝西省西安府周以後西漢・隋・唐時代までの都



兒童の走つて行くなど、若き米國萬歳の聲を發したい位である。

ニューイングランドの田舎の景色は、落着いて若々しい。如何にも懐かしい感じを與へる。歐米の大都會中どこが好いといはれたなら、誰もく賞めるのはパリであらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候は溫和、風光は佳麗、風俗は優雅、かういふ處に住んで詩でも讀んでゐたいとは誰も望むところかと思ふ。シャンゼリゼ

ーの大通は實に盛唐の長安もものかは、端麗高雅、世界第一であ

セーヌ
Paris 市中を流れる川

ノートルダム寺

Notre-Dame
Paris にある舊ゴシック式

Gothic architecture

る。

歌枕はどこにもごろ／＼してゐる。文明の最高に位するはフランスである、而してパリである。あくまで華美を極めた町の中にも、何處となく超脱した趣がある。車馬絡繹たるセーヌの河岸に、悠然綸を垂れる隠君子もある。橋の下には犬の髪結床がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。有名なノートルダム寺の建築はゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムのすべての變化を味ははうと、一日一晚の間、眺め暮した事もあつた。その最も美觀を極めるのは夕方の景色で、さながら黄金の光を浴びたやう。また夜のしじらとあけて、朝風の心地よく頬を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた様な色から薔薇色のはてやかなのに至る。

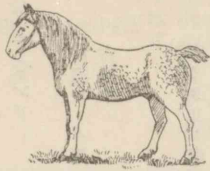
子 シャルロットの帽

Charlotte



ペルシロン

Perchro



ターナー
Turner (1775-1851)
家 英國の風景畫

までの色合の微かな匂を味はふことが出来る。其の外、花賣る老媪の風、シャルロットの帽子を被つて、ポールの箱を抱へた店通ひの賣子の姿、ペルシロンといふ牛よりも大きな馬を牽く馬丁の振、夜半近く芝居のはねた後に、雨が降つて幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車か唸り馬車が軋る不夜城の壯觀、満目の時勢粧、皆歌枕ならぬはない。



オランダの風車

ロンドンには佳景の地であるとは誰も認めないが、その色彩の變化や、色合の豊かな點は、ターナーの繪にある通りで、頗る味はふべき値がある。しかし同じ

テームス ロンドン市を西より東に貫流する河
 リッチモンド 英國ヨーク州の古城市
 ナポリ イタリア南部の都會
 ザルツブルヒ イギリス海峽
 The English Channel 英佛兩國の間にある海峽
 The Red Sea アラビヤとアフリカとの間にある海

く風光を味はふにしても、住心地よいパリの方が、あらゆる旅客の稱揚するところだと思ふ。たゞロンドンにもテームス上流のリッチモンド邊からの兩岸の風景には、英國特有の美觀が現れてゐる。此の他、風車、朱い屋根、清い淀に名あるオランダもよく、イタリアではナポリ邊の夢のやうな景色もよい。スウイスは風光明媚と稱せられる國で、誰も皆嘆賞するが、私は寧ろ南ドイツを取る。南ドイツのザルツブルヒの景は日本によく似てゐる。

要するに、何處の風光が一番勝れてゐるといふ事は一概に言ひ難い。見る人の心々によつて、如何なる處にも、相當の美は味ははれるのである。浪の高いイギリス海峽の船の上でも、暑さの堪へ難い紅海航行の甲板でも、それらの美は感ぜられる。元

來歌枕などと取出してきめるのは、間違つてゐるかも知れぬ。天下皆歌枕ではあるまいか。(心の花)

一八 希臘人の體育

永井 潜

吾等は理想の體育を行つた國民として、二千五百年の昔、文明の華を開いた希臘人を回顧し、これを吾等の儀表として仰がなければならぬ。古代希臘の民族こそは、實に、文化を造るべく、人類を代表せるチャンピオンであつた。教育といはず、藝術といはず、政治といはず、人間生活のあらゆる方面に於て、吾等の取つて以て模範とすべき立派な仕事を残した偉大な國民であつた。

この希臘人、選ばれた人間のチャンピオンであつた希臘人が、如何なる手段をつくして、あれだけの大いなる業績をなすべき力

希臘 ヨーロッパの東南端にあつた古の王國
 永井潜 生理學者 醫學博士 東京帝國大學教授 明治九年廣島縣生
 Champion 選手
 チャンピオン

スポーツ
競技

波斯
Persia
アジア洲の西部
にあつた古の王
國

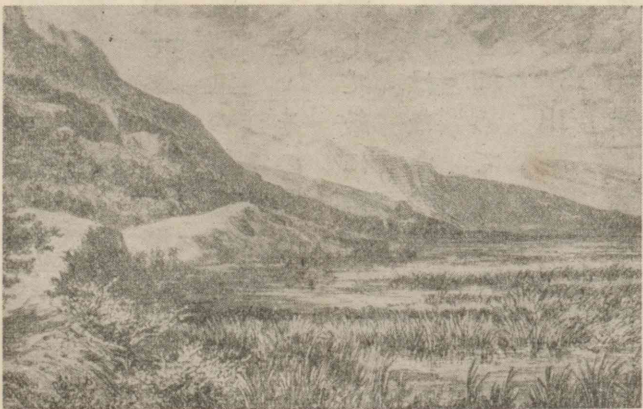
を養ひ來つたかといふと、一に體育殊にスポーツに依つてこれを養成し來つたのである。希臘人があの立派な文化の仕事を成し遂げるまでには、幾多の大いなる困難と戦はなければならなかつた。試に古代の歴史を繙いて見ると、希臘人が文明の種子を培ふべく、如何ばかり苦心慘澹したかを、目のあたり思ひ浮べずにはゐられない。當時、希臘と相並んで世界に覇を唱へた國は、波斯であつた。しかも人多く地廣き波斯は、連戦連勝の勢を以て、終に小國たる希臘を壓迫して來たのであつた。



圓盤投作

恰も暴れ狂ふ猛虎が、勇敢なる犬を搏たうとするやうな勢であつたのである。この恐しい壓迫に對して、希臘人は全力を盡くしてこれに對抗し、由つて以て其の文化を擁護し、其の精華を開くに至つたのである。

この戦こそは、全く、文明に對する未開の戦であり、貪婪に對する正義の戦であり、抑壓に對する自由の戦であつた。この大いなる戦に光榮ある勝利を得たる希臘人の強い強い力は、抑、何によつて養ひ來たのであるかといへば、實にスポーツ



テモルビレ

であつたのである。

その當時、希臘青年の意氣がいかに旺盛であり、希臘國民の元氣がいかに充實してゐたかは、戦争の際に起つた幾多の挿話を讀んで見ても、追懐するに餘りある次第である。波斯の大軍がマラソンの平野を壓して襲來した。波斯軍の最も得意な武器は弓であつたが、希臘人はこれに對して、たゞその胸を楯として闘つた。即ち危険を冒して躍進し、突撃して敵に肉薄し、短劍を揮つて敵を叩き斬るといふより外せん術はなかつたのである。希臘軍は必死を期して背水の陣を布き、極めて大膽に此の戦法を實行して、マラソンの奇捷を獲ることが出來たのである。

陸に敗れた波斯の大軍は進路を一轉して、水路、希臘の都を衝かうとする戦法に出た。その時に、希臘の一勇士キネゲイロスと

マラソン

希臘國アツチカの平原

アテンの東北三

十七軒

Marathon

西紀前四九〇年

希臘の名將ミル

チアデスが一萬

の軍を以て十一

萬の波斯軍を粉

碎した所

キネゲイロス

Cynxgeirus

いふ者が、敵の逃ぐるを追駈けて海濱へ來た、折しも敵の兵船が一艘軍兵を満載して將に岸を離れようとしてゐた。彼は右の猿臂を伸ばして船を抑へた。敵は直に右の手を斬つて落した。キネゲイロスは更に左の手を以て舷を抑へた。敵は又其の左手を斬つた、彼はいきなり大きな口を開いて舷にしがみついた。その刹那、あたら、勇士の首と胴とが所を異にしたといふ悲愴な物語がある。

更にまた、マラソンの平野に、希臘軍が波斯の大軍を撃破した時、この戦勝の報告を出來るだけ早くアテンの市民に報じたいといふので、オイクレスといふ青年が、韋駄天の如くに走り續けた。さうして城門に着くや否や、「我が軍勝てり」と叫ぶと共に息は絶えた。これに因んで行はれるマラソン競走は、永遠にこの壯烈

アテン

Athens
古代希臘の主都

韋駄天

佛法の守護神よく走る神として知られてゐる

弘安の神風

弘安四年(一九四)元寇のあつたときその兵船を覆したといふ海風

湊川の孤忠

楠木正成の湊川に於ける戦死

藏王堂の屯難

村上義光が護良親王に代つて藏王堂で切腹したこと

レオニダス王

スパルタの王
西紀前四八〇年

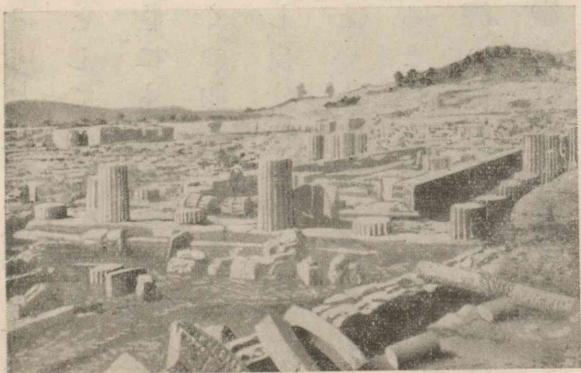
Leonidas
テルモビレー峠で名譽の戦死を遂げた

スパルタ

古代希臘ラコニヤの首都
ユーロタス河畔にある

なる勇士の愛國の精神を稱へてゐる。史を繙いて茲に至る毎に、或は弘安の神風を思ひ、或は湊川の孤忠を偲び、或は藏王堂の屯難を憐み、感極つて涕下るのである。而も、斯様な挿話は希臘史の到る處に散見してゐる。剛勇賢明なるレオニダス王の戦死の如き、最も光榮ある希臘精神の發露に外ならぬ。實に希臘青年のこの磐石の如き大勇猛心、この熱烈なる愛國の至情は、西歐文化の基礎を据ゑ、長へに其の生命を繋ぎ得たのである。而も希臘は何によつてそれを養ひ來つたか。全く眞のスポーツが行はれた賜であつたのである。古い西洋の都市では、何れも防禦の爲に城壁が築かれてゐる。然るにスパルタの都には、少しも城壁がなかつた。實にスパルタ青年の胸が金城鐵壁であつたのである。彼等の胸に涌立つ血潮

の一滴々々に護國の鬼神が宿つてゐたのである。抑、人間の人間たる本然の性は、眞と善と美とに憧憬して止まないことである。希臘人はこの眞・善・美を追求し、これを啓發せんが爲に體育を施した。由來希臘人は美にあこがれる國民であつた。世界が嘗て持ち得た最も偉大なる藝術の多くは、二千年も昔に希臘人によつて創作せられ、永くその規範が遺されてゐるのである。そして又希臘人は、その美の極致が自分自身の身體にあることを夙に看て取つたのである。その證據には、圓滿具足せる全知全能の



址遺のヤピンリオ

神を象るものとして、多くの文明人及び未開人が、怪異珍奇何れも恐るべく驚くべき形を借り來つてゐるに反して、獨り希臘人のみは、人間の體によつて神を現さうとしてゐる。それは希臘人が、人體を以て、何物にも譬へ難い、何物にも擬へ難い美の極致であると思つてゐたからである。かくの如くして、希臘人の體育は、美を憧憬し、美を感受し、美を尊重し、自分自身の持つてゐる美を出来るかぎり立派に完成しようといふ人間愛の迸りであり、自分のもつ最も貴きものを愛護するといふ熱烈な精神を背景としてゐたのであるから、そこに奥深い根柢があり、燃ゆるが如き熱誠が籠つてゐた。更にまた希臘人は眞を熱愛する人間であつた。眞理を求むる心と、眞理によつて與へられる尊きものを獲得することの光榮と、此の二つの願望が、希臘人をして、體

育の中でも殊に競技に重きを置かしめ、國を擧つて競技を喜ぶ行動となつて現れて來たのである。(人及び人の力)

一九 偉人

嘉納治五郎

嘉納治五郎
教育家
貴族院議員
東京高等師範學校名譽教授
講道館師範
萬延元年(1860)攝津國灘生

古來の生民蓋し幾萬億、其の中より卓然として崛起し、功業德澤炳として萬世の下に輝いてゐる者は、實に彼等偉人である。若し偉人を人類の歴史から除き去つたとすれば、吾人の過去は如何に暗澹として如何に寂寞なものであらうか、幸にして幾多の偉人傑士が星の如く歴史の空に列んでゐて、今猶吾人の心中に不老の其の輝を投じ、破闇の其の光を耀してゐるので、吾人類は此に始めて意義ある過去を有し、光榮ある現在を有するのである。随つて吾人の文明は彼等を離れて解釋することは出

大上は徳をたて
大上ハ徳ヲ立ツル有
リ、其ノ次ハ功ヲ立
ツル有リ、其ノ次ハ
言ヲ立ツル有リ。久
シト雖モ廢セズ、此
ヲ之レ不朽ト謂フ。
(左傳)

來ない。吾人の經營しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹して之に新發展を加へんとするに外ならぬのである。古語に「大上は徳を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つ」と曰つてあるが、徳にもあれ、功にもあれ、言にもあれ、彼等が人類に及した影響は不朽不滅である。凡そ世の中に、壯快といへば偉人の事業ほど壯快なものはなく、崇高といへば偉人の人格ほど崇高なものはないのである。

試に思へ、我が國が明治の御代になつてから長足の進歩を爲し、世界の奇蹟とまで稱せらるゝに至つたのも、其の直接の原因は王政の維新にあるのである。さうして王政の維新は幾多の偉人傑士の努力奮闘より生じた結果である。至誠皇室を尊び、衷心民人を愛し、大勢の趨く所に着眼して經國の大本を定め、謀慮

筆蹟

去歲千軍我ガ疆ニ逼
ル。今朝孤劍他郷ニ
入ル。浮生萬事變ジ
テ夢ノ如シ。一片依
然タリ男子ノ腸。
戊辰之歲
松菊狂生

深遠、規畫周密、大いに皇猷を贊したのは、彼の木戸松菊であつた。高く自ら任じ、篤く自ら信じ、沈毅端嚴善く斷じ、時局の紛難を處理すること快力の亂麻を斷つが如く、凜々たる英風よく上下の信頼を得て國家の柱石となつたのは、かの大久保甲東であつた。

去歲千軍我疆ニ逼
今朝孤劍他郷ニ
浮生萬事變ジテ
夢ノ如シ。一片
依然男子ノ腸。
戊辰之歲
松菊狂生

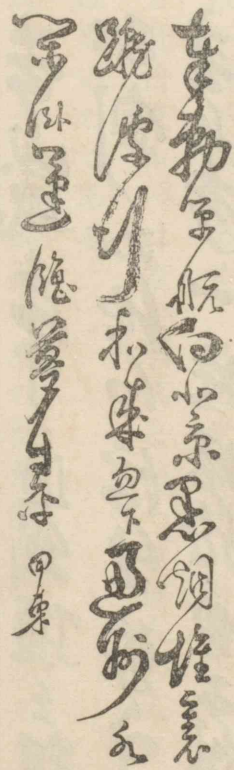
木戸松菊 光明磊落
規模宏豁
孝子 安危利害
允爵 脱して、泰
筆藏 の上に超

然として動かず、曠懷偉度、清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、談笑して天下の勢を制し、國家を磐石の安きに置いたのは彼の西郷南洲であつた。木戸の識、大久保の斷、西郷の量、三

筆蹟

勅ヲ奉ジ單航シテ北
京ニ向フ。黒烟堆裏
波ヲ蹴テ行ク。和成
リテ忽チ下ル通州ノ
水。閑カニ篷隠ニ臥
シテ夢自ラ平カナリ。
甲 東

者相俟つて此に天地を旋轉するやうな大業が成就せられたのであつて、世に彼等を尊んで維新の三傑と稱するも亦偶然でないのである。當時彼等が協心戮力して經國の大業を建てつゝあつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝海舟の如きがあつて、よく



大得 時艱を濟つ
久能 たのであつ
利通 た。海舟人
通昌 となり雋異
筆藏

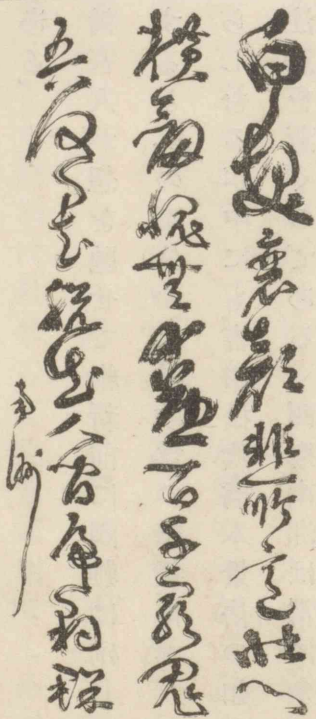
卓拔、其の炯々たる眼識はよく時局を大觀し、機略縱横、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして恭順の實を挙げしめ、生民をして塗炭の苦を免れしめたのであつた。

維新前後は我が偉大なる國民精神の最も著しく發揮せられた

筆蹟

白髮衰頽意トスル所
ニ非ズ。壯心劍ヲ横
タヘテ勳無キヲ愧
ツ。百千ノ窮鬼吾何
ゾ畏レン。脱出ス人
間虎豹ノ群。
南 洲

時で、偉人傑士の風雲に乗じて起つたものは甚だ多かつたのであるが、就中海舟南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳ゆるが如く、嶄然として頭角を現したものであつて、若し此等の人がなかつたならば、維新回天の事業もかく速に圓滿なる成功



西 出 來 な かつ た て
野 伯 あ ら う と 疑 は れ
隆 府 る 程 で あ る 。 我
盛 藏
筆 藏

初年に於て、早くも上下心を一にして盛に經綸を行ふといふ國是に従ひ、世界の競争場裏に進んで大いに國勢を張ることを得たのは、實に此等偉人の賜である。吾人國民が景慕の情を傾け

て之が傳を立て、之が像を掲げ、彼等の墓門既に苔むせる今日、彼等が猶吾人の中に活き、吾人を導いてゐるやうに思はれるのは、實に其の雄偉なる人格と其の赫々たる功業とを證するものである。

猶吾人が想を馳せて維新前に國難に殉じた多數の志士を追懷すると、其の奉公の赤誠、敢爲の志氣、轉、吾人をして感慨に堪へざらしむるが中にも、吉田松陰、橋本景岳の如きは、最も強く吾人の注意を惹くのである。西郷南洲は常に「余は先輩に於ては藤田東湖に服し、同輩に於ては橋本景岳を推す。二子の才學器識はとても吾が輩の及ぶ所ではない」といつた。時に南洲は三十歳、景岳は二十三歳頃であつた事を思ふと、景岳は我が國の青年偉人中でも最も卓越せる者といはねばならぬ。かれ叡智靈覺涌

吉田松陰

長州の志士

名は矩方

安政六年(五二九)刑死
年三十

橋本景岳

越前の志士

名は綱紀

安政六年(五二九)刑死
年二十六

藤田東湖

水戸の志士

名は彪

安政二年(五二五)震死
年五十

身を殺して仁をなす

子曰ク、志士仁人ハ
生ヲ求メテ以テ仁ヲ
害スルコト無シ。身
ヲ殺シテ以テ仁ヲ成
スコト有リ。(論語、
衛靈公)

五人の大臣

伊藤博文

山縣有朋

山田顯義

品川彌二郎

野村靖

くが如く、早くも國家の大計に着眼し、一青年の身を以て政界の大波瀾の中に手腕を試みたのであつた。不幸にして二十六歳を一期として刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等の知己に依つて成就せられた。吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として青史を照らしてゐる。忠愛の至誠、英發の志氣、大義の存する所は水火をも避けず、身を殺して仁を成すといふ志士の本領は、彼に於て最もよく見ることが出来る。彼が一小私塾の教育に盡くした熱誠は、幾多の志士を輩出せしめて王政維新の急先鋒となり、明治の御代になつてからも五人の大臣を出した位であつた。吾人は松陰、景岳に依つて、英偉なる人物が其の少壯期に於て既にかくも貴き事業を爲し得たことを詳にし、感歎の情に

堪へないのである。

かく吾人は明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を傾け、感謝の意を表すると共に、此等の偉人の後を受けて我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なるに想ひ到らざるを得ないのである。少壯國民にして自家の任務の重大なるを知る者は、又よく此等の偉人を學んで其の先蹤を繼ぐことを務めねばならぬ。頼山陽は十四歳の少時に、

十有三春秋。逝者已如水。天地無始終。

人生有生、死。安得類古人。千載列青史。

と歌つた。古來の偉人が少年青年の時よりして漸く發達した逕路を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して感憤興起したのに基づいて居るのである。偉人を景仰するのは青年自然の情

であつて、此の情の生ぜぬものは、其の志多くは低劣で、其の行亦多くは鄙陋である。吾人は前代の偉人に活理想を求めて、此に志氣を振ふことが出来るのである。志氣が振つて、此に向上發展の途に就くのである。

固より、古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したものである。偉人の事業には、時代の大勢が與つて其の背後の力となつてゐるものもある。それで偉人を學ぶものが、誰も皆偉人となり得るといふことは難い。併し偉人を學ぶことに依つて、天才ある者は益、之を英偉に發揮することが出来、凡庸なものは、其の人として最高度の發展を爲し得るのである。孟子は「聖人は百世の師なり。伯夷、柳下惠是なり。故に伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉に、懦夫も志を立つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄

聖人は百世の師なり
孟子の盡心下篇に見えてゐる

夫も敦く、鄙夫も寛なり。百世の上に奮ふ。百世の下、聞く者興起せざるなし。と言つた。偉人を學ぶべき者は獨り偉人には限らない、懦夫も鄙夫も皆偉人に依つて鼓舞せられ、激勵せられ、感化せられ、指導せられ、以て高上の生活に進むのである。且古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられた者が、他日巍巍として衆目を驚かすやうな發展を爲し得たことが、少からず史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられて居るものも、決して失望自棄するを要しないのである。前に列舉した維新前後の六偉人のごときは、何れも皆微祿の士であつた。南洲、特に海舟の如きは、眞に赤貧洗ふが如きものであつた。松陰、景岳の如きは、生來虚弱多病であつた。南洲の如きは、少時極めて魯鈍といはれたものである。松菊、甲東の

王侯將相
壯士死セズンバ即チ
已ム。死セバ即チ大
名ヲ擧ゲンノミ。王
侯將相寧ンゾ種有ラ
ンヤ。史記、陳涉世
家)
舜何人ぞ
顏淵曰ク、舜何人ゾ、
子何人ゾ。爲ス有ル
者亦此ノ若シ。(孟
子、滕文公)

如きも、少時は意氣が壯なのみで、特に英才の煥發した譯ではなかつた。若し彼等が精勵刻苦して勳功を建つるに及ばず、不幸夭折したならば、青年偉人として後世に傳へらるべきことは何もなかつたであらう。此等のことを思ふと、我も人なり、彼も人なり。といふ思想は、決して僭越狂妄として排斥すべきではない。「王侯將相寧んぞ種あらんや」といひ、英俊とは凡常の士の發憤勉勵したるもののみ。と言つたのも無理ではない。顏淵は「舜何人ぞ、子何人ぞ」と言つた。有爲の士の志を立つることは常に此の如きものである。今や我が國は世界の日本として大活動大發展を爲すべき時に臨んでゐる。公私各般の事業に於て英偉なる人物を要することは甚だ急なのである。今日の多數青年の中、誰かよく前英に續ぎ、來者に先だつて大業をなすであらうか。

雙が岡

京都市右京區花園町にある岡陵一座三墳をなし南北に並ぶ

兼好法師の家集に

雙が岡に無常所を設けて傍に櫻を植ゑさすとして

ちぎりおく花とならびの岡の邊にあはれ幾代の春をすぐさむ

萩原井泉水

名は藤吉

俳人

明治十七年東京市生

妙心寺

臨濟宗妙心寺派の本

山

京都市右京區花園町にある

偉人を師として奮起するは終生の最大快事であつて、假令運命は其の人をして偉人の名を成さしむるに至らしめずとも、我として最高の發展を爲し得たならば、人生の目的は此に達せられたといふべきではあるまいか。(青年修養訓)

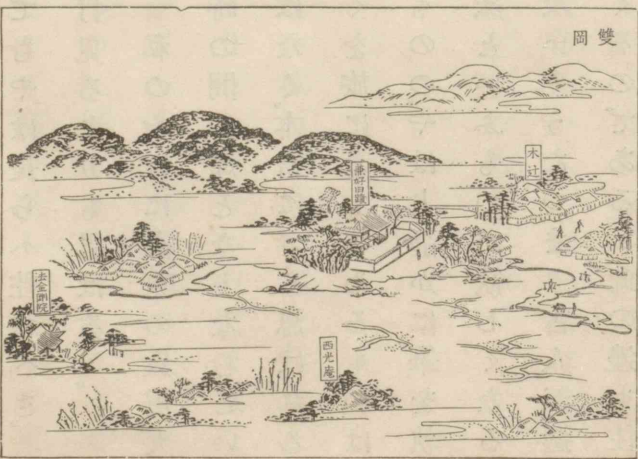
二〇 雙が岡

萩原井泉水

妙心寺を西に道をとれば、雙が岡はすぐ近くであつた。細い松の木がびつしりと生えて、なだらかな弧線をなした低い岡である。道の端に立派な別荘風の建物が新しく出来てゐた。又、麓の冬田の端のところへ、瀟洒とした家が建つてゐた。「時雨庵」などと風雅めいた額を掛けたものもあるが、さてどんな人が住んでゐるのであらうか。

家居のつきと、しくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど

も、興あるものなれ。よき人のどやかに住みなしたる處は、さし入りたる月の色も一きはしみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覺えて安らかなるこそ、心憎しと見ゆれ。多くの工匠の、心をつくして磨きたて、唐の、大和の、珍しく、えならぬ調度ど



會 圖 所 名 都

兼好

吉野朝時代の文學者

歌人

俗名吉田兼好

正平五年(1110)寂

年六十八

關東の大震火

大正十二年九月一日

も並べおき、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき。また時の間の煙となりなむとぞ、打見るよりも思はるゝ。兼好は徒然草にかう書いてゐる。私のやうに、關東の大震火をまのあたりに見て來たものは、又時の間の煙となりなむといふ氣持は決して一片の無常觀念ではなく、本當にさう思はれるのである。又、私のやうに一年の多くを旅に暮してゐるものは、宿屋暮しをしても事は足ると思ふもの、やはり靜かに筆を執つたりするには、自分だけの小さな家といふものが欲しくなる。それは、いつ破りすても惜しくないやうな、つまり古人が選んだ庵といふものの意味が解つてくるのである。此の邊も住むには悪くなささうだ、しかし、何となく寒さうな氣がする。妙心

寺ではらくと逢うた雪はいつかやんでゐたが――。

「あゝ、もし、雙が岡といふのは、かういふ岡が三つあるのですか。私はたま〜通りかけた土地の人らしい人に問ひ掛けた。

「さやう〜、一の岡・二の岡・三の岡と三つあります。」

「山の上に道がありますか。」

「すそに細い道があります。」

其の教へられた通り、松山の裾に近い林の中の小徑を行くと、大きな籠を負うた女がひよつこりと山の上の方から出て來た。

籠の中には松葉が半分程もはいつてゐる。「林間酒ヲ煖メテ紅葉ヲ燒ク」といふ風な情趣を味はふのに好ささうなところである。昔、仁和寺に美しい稚兒がゐたので、誘ひ出して遊んで喜ばさうと、法師たちが相談を凝らして、先づ風流の辨當をこしらへ、

林間

唐の白樂天の詩句

仁和寺

京都市右京區御室にある眞言宗の名刹

箱に入れ、雙が岡のこゝと思ふところへ埋めて置いて、やがて遊
 びに疲れた頃、誰ぞ紅葉を焚け、御馳
 走を祈り出すものはないか。などと
 冗談をいひ、丁度覚えておいたとこ
 ろに立つて、數珠をすり、印を結んで、
 さて掘つて見たが、埋めておいた物
 は誰かに盗まれたかして、影すら無
 い、一同興さめてしまったといふ、徒
 然草にある諧謔的な小話は、此の邊
 の事であつたらうかなどと思はれ
 る。其の林間の小徑を出はづれたところに仁和寺の山門はあ
 る。



仁和寺山門

芭蕉の句

京に上りて三井
秋風が鳴瀧の山
家を訪ふ

梅林
梅白し昨日や鶴を盗
まれし
椶の木の花にかまは
ぬ姿かな
(野晒紀行)

五智如來

大日如來
阿闍如來
彌陀如來
釋迦如來
寶生如來

それから私は、雙が岡の裏側に出て見ようと、なほ西へ道をとつ
 たが、芭蕉の句が残つてゐる鳴瀧といふ所も遠くないのであつ
 た。そこは仁和寺の裏山と其の西にある砥石山との二つの翼
 に挿まれた谷のやうな感じの所で、細い川が一筋流れてゐるの
 が鳴瀧川である。昔は水量も多く、水音が鳴りとゞろいてゐた
 ものであらうが、今は水も浅く、但し瀧の形だけは昔をとゞめて、
 川水が段をなして落下するのである。その川を越えて、砥石山
 の裾に取付いて登ると、五智如來がある。樋口平太夫といふ盜
 賊が發心して、懺悔滅罪の爲に作つたものだといふ傳説を面白
 く思つて、私はそこにも行つて見た。五體の佛は高さ九尺ばか
 りの人造石で、稚拙な作が却つてほゝゑまれるやうなものだつ
 た。其の山上からは仁和寺の塔も見え、雙が岡も一の岡・二の岡

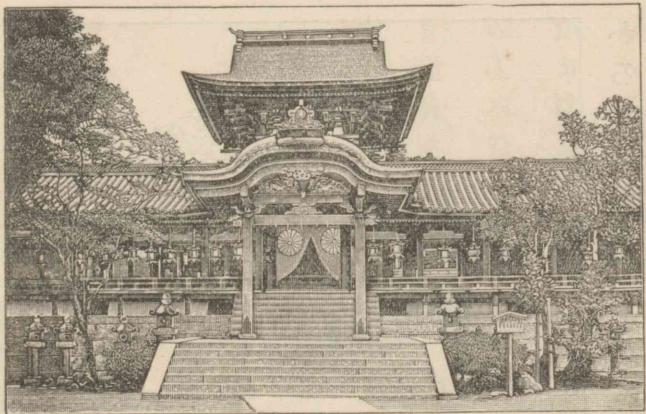
三の岡と揃つて並んで見え、遠くに東山の緑の連峯も望まれるのであつた。獸の糞のやうな松笠がころ／＼と落ちて居るのも寒かつた。(京洛小品)

二 仁和寺の法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、あるとき思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良など拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人に逢ひて、年頃思ひつること果しはべりぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りける人ごとに山へ登りしは何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞ言ひける。

石清水
京都府山城國綴喜郡
八幡町男山なる石清
水八幡宮
仁和寺の南二十餘軒
極樂寺
高良
共に男山の麓にある
寺社

少しの事にも、先達はあらまほしきことなり。



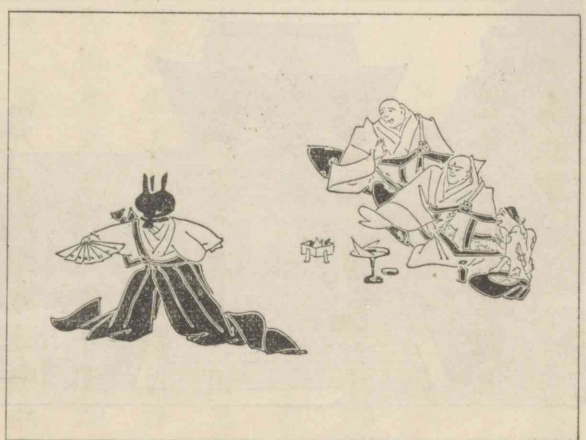
石清水八幡宮

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならむとする名残とて、各遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、かたはらなる足鼎を取りて頭にかづきければ、つまるやうにするを、ハ鼻おしひらめて顔を入れて舞出でたるに、満座興に入ること限りなし。しばし奏でて後、抜かむとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞはれにはれみちて、息もつま

りければ、打割らむとすれど、たやすく割れず、ひびきて堪へ難かりければ、叶はで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を引き杖をつかせて、京浮國なるくすしがりゐて行きけり。

一 田筆華道すがら人の怪しみ見ること限りなし。醫師のもとにさし入りに向ひゐたりけむ有様、さこそはことやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。か

かることは書にも見えず、傳へたる教もなし。と言へば、又仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣悲し



めども、聞くらむとも覺えず。

かゝる程に或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなにか生きざらむ。たゞ力を立てて引きたまへ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。辛き命まうけて久しくやみゐたりけり。(徒然草)

二二世の中

富士の山夢に見るこそ果報なれ路銀もいらざくたびれ

もせず
(富士山へ登つたことを夢に見るのは仕合せであらうと云へば、別な旅費も入らず)
(又くさかやもせぬか)
 木 端

鯛屋貞柳
 本名榎並善八
 大阪の人
 享保二十年(三九五)歿
 年八十二

木端
 大阪の人
 安永二年(四三三)歿

頭光

本名岸誠之

江戸の人

寛政八年(一四九六)歿

年七十

月見ても

月見ればちよにももの
こそかなしけれ我が
身一つの秋にはあら
ねど(大江千里)

唐衣橘洲

本名小島泰從

江戸の人

享和二年(一四六二)歿

年六十

菜もなき

心なき身にも哀れは
知られけり鴨立つ澤
の秋の夕暮(西行)

馬場金埒

本名大阪屋甚兵衛

江戸の人

文化四年(一四七七)歿

世の中は何のへちまと思へどもぶらりとしては暮され
もせず

世の中何事は何りへちまと思へどもぶらりとは暮され
るやうにぶらりとして暮らすもなす
頭光

月見てもさらに悲しくなかりけり世界の人の秋とおも
へば 月見ても一向に悲しくなかりけり世の中何事は何りへちまと思へどもぶらりとは暮され

百多かけ一こまのしく感じをうたう
唐衣橘洲

菜もなき膳にあはれは知られけりしぎやき茄子の秋の
夕ぐれ 秋の夕飯のお膳を見よとしぎやき茄子より外にうたう

まがもなき膳にちかはすなむものをも
馬場金埒

雪ならばいくら酒手をねだられん花のふぶきの滋賀の
やまかご 山かごに車は滋賀の山を越えりて櫻の花が雪のやうに降る

またも雪はくはる雪のちをなす雪のちをなす雪のちをなす
元 奎 網

雪ならば

雪ならば幾たび袖を
はらはまし花の吹雪
の滋賀の山越(謡曲
志賀)

元奎網

通稱大野屋喜三郎

江戸の人

文化八年(一四七二)歿

年八十一

四方赤良

本名太田覃

又の號は蜀山人

徳川幕府の士

文政六年(一四九三)歿

年七十五

筆蹟

莊周も猫におはれて
うなされん蝴蝶とな
りし春の日のゆめ
蜀山

宿屋飯盛

國學者

小説家

本名石川雅望

天保元年(一四九〇)歿

年七十八

また一つ年はよるとも玉手箱あけてうれしき今朝のは
つ春 ますまは年はとりも年かより今日うらむを白へるこころ

如何も喜し
四方赤良

早蕨がにぎりこぶしを振りあげて山のよこつらはる風
ぞ吹く 早蕨がにぎりこぶしを振りあげて山のよこつらはる風

山が柱倒れまゐるこころを春風かきかき吹くこころよ

宿屋飯盛の筆蹟

筆良赤方四

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出して たまるも

宿屋飯盛

天地の
力をも入れずして天
地を動かし目に見え
ぬ鬼神をもあはれと
思はしむるは歌なり
(古今集序)

山路愛山

評論家

名は彌吉

駿河國生

大正六年歿

年五十四

神護景雲三年

稱徳天皇の御代

(一四七)

のかは 歌人は下ケに歌をよもよよ上ケん後んかう天地を動かし出すと
そまうもいすう、みをよらん

二三 武士道

山路 愛山

神護景雲三年、朝廷警衛の爲、東人を召させ給ひし時の詔に、東人は常に「額に箭は立つとも背には立てじ」といひて、君を一心に護るものぞ」とあり。東國は蝦夷と境を接して、人種の生存競争劇しく、戦争も多かりしゆゑ、自ら健氣なる風を養成したるならん。蝦夷の叛亂聞えずなりし後も、天慶以來幾度か干戈動き、大名、小名の私闘も亦少からず、人氣自ら上國に殊なり。かくて武士道もこの間に成長したり。

武士道とはいかなるものぞや。一定の釋義を下すはむづかしきことなれども、まづは武士の間に行はれたる面目律ともいふ

我が首
この事は吾妻鏡にあ

大庭

三郎景親

武將の身
藤原教長の語
保元物語にある
勅命を
この事は保元物語に
ある

べきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。頼朝は石橋山の厄難の時、日頃髻の中に隠しおきたる觀音の像を取出し、我が首若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此の本尊のあるを見れば、源氏の大将の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ、かくは取出し奉るものなり」といへり。崇徳上皇、爲義を白河殿に召させたまひし時、爲義昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰を辭退せんとしたるに、使の殿上人、武將の身として、夢見物忌などは餘りに後れたる沙汰なり。といはれしかば、爲義實にも、とて參殿に及びたり。宗旨も信仰も、武士に取りては日常の事なり。一旦非常に臨んでは、唯何事も惑はず突進するが武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は、勅命を蒙つて罷向ひたるものが、敵陣強しとて

義平
義朝の長子源太義平
義平が
この事は平治物語にある

侍程の
長谷部信連の語
平家物語にある

大名は
侍は草の靡き
(承久軍物語)

引返すべき様やある。といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、義平が河より西へ引きつるは家の疵と覺ゆるぞ。今は何をか期すべき。討死せんのみ。といひて敵陣に馳突したり。臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、額に箭は立つとも、背には立てじ。とあると同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなどいはれんは口惜し。侍程の者が一度申さじと思ひ切りし事を、縦ひ拷問せられたればとて申すべき様なし。といふが如く、何事も思ひ切つて悪びれぬを武士の魂とす。次に其の頃の武士道にて主と重んじたるは、志の專一なることなり。尤も、大名は草の靡き。といふ諺は其の頃よりあり。強さうなる方に荷擔して所領安堵を求むるは一般の習なりしかど

源氏は
源親治の語
保元物語にある

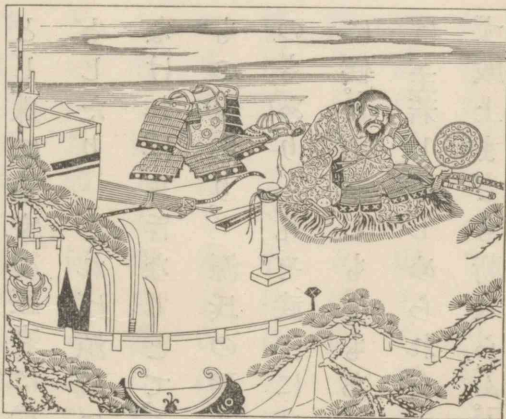
源氏の習
源義朝の語
平治物語にある
凡そ武士には
源義平の語
平治物語にある
主若し
平家貞の語
平家物語にある

關東に
この事は吾妻鏡にある

も、さりとして輿論は、かく意氣地なきを善しとせしには非ず。主従の義を重んじ、忠を主人の家に盡くすを以て眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に従つて向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に従ふ武士は、源氏は二人の主取ることなければ、宣旨なりとて、えこそ内裏へは參るまじけれ。といひしものもあり。源氏の習、心變りやあるべき。とて肩を怒らししものもあり。凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏の習は左様に候。と力みしものもあり。平家に従ふ武士も、忠盛の家の子には、主若し辱しめられたらんには、えこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上までも斬入らんと決心したるものもあり。平宗清は頼朝の恩人にて、頼朝より「關東に來らば善く扶持せん。」と言送りたれども、平家零落の後、頼朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候。とい

吉について
この事は平家物語に
ある

病身ながら
加藤景康の語



藤源平盛實盛平
齋盛平
盛實盛平
齋盛平
盛實盛平
齋盛平

ひ、直に屋島の内府に参り、運命を主家と共にしたり。齋藤別當
實盛は、吉についてあなたへ参り、こなたへ参らんは見苦し。今
は源氏の世盛となりたりとも、我
は平家の味方となりて討死せん。
とて、黒く染めたる白髪首を木曾
義仲の士に取らせたり。
かく臆病を悪み、主人に忠を盡く
すを主としたる武士道が、其の結
果として死生を度外に置きたる
は當然なり。東國武士が平家を
西海に討ちし時、病身ながら天下の重事なり、坐視すべきにあら
ず。とても死ぬる身ならば戦場に死なん。とて出陣したる者の

事あらば
平治物語にある源義
朝の語がこれに似て
ある

合戦の場
この事は保元物語に
ある

我は
この事は保元物語に
ある

ことは、吾妻鏡に見えたり。「事あらば眞先かけて命を主君に奉
らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、なか／＼最期の
恥あるなり。」とて、腹搔切つて死したるは其の頃の武士の習なれ
ば、義朝も、合戦の場に罷出て何ぞ生命を存ぜん。といへり。さ
れば、頼朝が十四歳にして父撃たると聞きながら、自害をもせず、
池禪尼にすがりてかひなき生命を助かりしを、時の人は善くも
言はざりしなり。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著しき一箇條は、人々互に功名
を競ひたる事なり。爲朝が白河殿にて、我は親にも連るまじ、兄
にも具すまじ。功名不覺も紛れぬ様に、唯一人いかにも強から
ん方へ差向け給へ。敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも、一方
は射拂はんずるなり。」と廣言したるは、最も善く武士の氣習を言

ひあらはしたるものにて、佐々木梶原の守治川先陣なども其の

一例なり。



宇治川先陣

但し弓矢の道といひ、武士の道といふもの、畢竟自然に生じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明らか

に區別を立て得べきものに非ず。さりとして其の面目律の制裁は、頼朝時代にてもなかなか嚴重にして、武士道に外れたる者は武士の間には生きて居ら

此の殿は
この事は平治物語に
ある

れぬ程なりき。例へば平治の亂に、源氏の士ども、藤原信頼を見限り、此の殿は、人に頬を打たれて返事をもし給はねば、侍の主

叶ひ難し。といひしが如く、大將にして武士道の心得なければ、士卒附かず、侍にして名を惜しまず、卑怯の振舞あれば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして、都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりし故、天下の勢遂に上軽く、下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。

さりながら、東國の武士が天下の主人となりたるは、獨り武士道の盛なりしが爲には非ず。保元以來、都に兵事多く、京洛の客往

往四方に散じ、天下經營の知識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩摩は武道の盛なる處にして、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりしかども、

島津齊彬
鹿兒島藩主
勤王家
安政五年(五八)薨
年五十
重豪
鹿兒島藩主
外國の事情にも通じてゐた

北條
伊豆の北條時政
三浦
相模の三浦義明
千葉
下總の千葉常胤
小山
下野の小山朝政

それだけにては天下に功を立つることもならざりしに、島津齊彬あまきの祖父重豪しげたか、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の邊土にて武士の片意地なることを憂ひ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風を移ししより、薩摩固有の武士氣質と上國の知識とは此に相合して、薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れるなり。東國の強きのみにては、未だ天下を圖り難し。頼朝は北條三浦千葉小山などいふ東國武士の力を假りたると共に、大江廣元三善康信などいふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるなり。武士道も開化せざれば唯強きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始めて役に立ちしなり。

(愛山文集)

徳富蘇峰

新聞記者
貴族院議員
名は猪一郎
文久三年(三五三)
肥後國水俣町生

二四 大死一番

徳富蘇峰

日本帝國の運命は、日本國民の自力に依りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃む外に方便も手段もあらざればなり。よし千百の方便手段ありとするも、その自力主義踐行の後に於て、始めて其の効用を見るべければなり。然りと雖も、吾人の所謂自力主義は決して自滿主義にあらず、自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや、排外主義をや。吾人は、我が短を補ふべく、世界の總べての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と步趨を一にせざるべからず。而もこれ唯内に自ら持する所ありて、而して後外に向つて之を求むべきのみ。

吾人は我が國民が精神的に獨立し、而して後、世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞ。日本國民は日本國民として、其の獨得の立脚地に於て内外一切の經綸を定むることはなり。東洋の獨逸にあらざ、東洋の英米にあらざ、日本は東洋の日本としてなり、日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に依りて裁斷を下すにあるのみ。かくの如く、内既に支持する所あり、乃ち外に向つて其の益を求む、必ずしも英米と言はず、必ずしも獨佛と言はず、世界の長は皆採りて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何をか遲疑せんや。

惟ふに、我が國當今の憂は、第一、國民の情氣滿々たることなり。別言すれば、國民猛志を銷磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日

待つあるを
 故ニ兵ヲ用フルノ法
 其ノ來ヲザルヲ待ム
 ナク、吾ガ以テ待ツ
 アルヲ待ムナリ。其
 ノ攻メザルヲ待ムナ
 ク、吾ガ攻ムベカラ
 ザル所アルヲ待ムナ
 リ。(孫子)

本は既に五大國の一に位せり。曰く、日本は既に東洋の盟主たり。曰く、日本は既に富強なりと。而して更に磨礪自彊し、此の國運を進一轉せしむるを閑却しつゝあるなり。

第二、世界の大勢を根本的に謬解したるにあり。曰く、世界は泰平なり。今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし。國際的葛藤は聯盟によりて自動的に安排せらるべしと。彼等は其の待つあるを待まず、其の來るなきを待み、其の待むべきを待まず、待むべからざるを待むなり。

第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも多くの者より排斥せられつゝあるなり。これ必ずしも日本國民の罪とのみ謂ふべからず。而も其の原因はいづくにあるにもせよ、事實は正しく此の如し。而して我が國民が、かくの如き不

愉快なる事實を正視し、認識し、之に處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。

第四、我が國民は、物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを怠めず、進んで世界に向つて自國の真相を闡明し、世界の誤解を正すことを努めず、たゞその日暮しに一時の苟安を偷取しつゝあるは何ぞや。

第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるに非ずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。蓋し、吾人が自力主義なるものは、内に國民の道義的自信力を扶植し、先づ自ら

不敗の地位を占め、而して後、徐に外に向つて我が志を行ふにあるのみ。

かくの如くして世界と協調を保つべく、かくの如くして東洋の盟主たるべく、かくの如くしてアングロサクソン民族と角逐して世界の文明に貢献し、大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣怠慢、強ひて自ら欺いて眼前を糊塗し去らんとし、此の如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に死亡するに至るべし。世界の歴史は進歩の歴史なり、改善の歴史なり、向上の歴史なり。吾人は如何に一方に痛楚號泣するが如き現象を見るとも、他方には光明と平和との到來を疑ふ能はざるなり。但し之を果さんが爲には非常なる危険、非常なる艱難、非常なる

Anglo-Saxon
第五世紀のころ
獨逸の北西部より
英吉利に來て
今の英國を開いた民族

苦痛を経ざるべからず。即ち今や吾人は此の一大試煉の時期に遭遇せるものなり。當面の問題は、我が日本國民が果して之に及第するか否かに在るのみ。

嘉永・安政の際に於て、我が日本は全く内憂外患の危機に擠されたりき。而も我が先人は種々の失敗過誤を累ねたるに拘らず、遂に之を排除して維新中興の新局面を開きし。顧ふに明治半百年に互れる國運の増進は、固より明治天皇聖徳の致す所なりと雖も、亦嘉永・安政より元治慶應に至る國歩の艱難によりて之を培養したるものと謂はざるを得ず。人は艱難に生きて安逸に死す。國も亦然り。英佛兩國の現時に於て再生復活しつつある所以、亦固より大戰の大試煉を経來りたるが爲のみ。吾人は之を我が國の過去に徴し、之を英佛諸國の現在に徴し、我が

帝國の前途に横たはる無數の危殆困難を豫想して、毫も自ら失望落膽せず。若し然る可き理由あらば、それは無數の危殆困難そのものにあらざ、寧ろこれに氣附かず、空々寂々悠々寛々として、苟且偷安を事とする我が國民的精神の潰破これのみ。

我が國民が自ら冒進するにせよ、はた回避するにせよ、何れにしても我が國民の一大試煉の時期は既に到來しつゝあるなり。

此の上の問題は果して國民の一大決心・一大努力・一大奮闘もて之に打克たる可きかにあり。吾人は先づ我が國民が國運の消長興廢の十字街頭に立つことを自覺せんことを望む。次に此の國家的一大危機に向つて勇進し、潔く此の一大試煉に及第せんことを望む。而もこれ決して容易の業にあらざるなり。吾人日本國民は何れも國家的に大死一番して、而して後其の再生

復活を期せざるべからず。如何に國家の難局を逃避すとも、來るべきものは遂に來らざるを得ざるなり。吾人は寧ろ今日に於て之を覺悟し、鐵石の心腸もて之に當る決心なかる可からざるなり。輕々しく其の趾を擧ぐる勿れ、漫りに其の腕を扼する勿れ。忍ぶべきは忍べ、耐ふべきは耐へよ。唯我が大和民族たるものは世界公論の容す所に據り天下の大道を行ひ、國際共通の正義を旨とし、以て我が所信を遂げよ。吾人は我が力を恃むと共に、我が正義を恃とす。かくの如くして與國の我を助くるあらば、與國と共にすべし。苟も與國なくんば我躬ら往くべき道を往かんのみ。

吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏るべきものあらば、そは内憂にあり。内憂の中殊に畏るべきは國民的志趣の銷磨にあり。知らず、我が國民は大死一番以て自ら新生命を贏ち得る覺悟あるか。活裡死あり、死中活あり。生を欲する者は死、死を敢へてするものは生。國家の前途を解決すべき祕機は、唯此の死生の二字中にあり。(大戰後の世界と日本)

新國文讀本 卷六終

新國文讀本 卷六

昭和七年八月二十二日印刷
昭和七年八月二十五日發行
昭和八年一月二十二日修正再版印刷
昭和八年一月二十五日修正再版發行

文部省檢定

用科教科文漢語國校學中 日十三月一年八和昭
用科教科語國校學業實 日三十月七年八和昭



本館發行的教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

編者 發行者 發行所 印刷者

東京市小石川區高田老松町五二番地

吉田 彌平

東京市神田區神保町一丁目五番地

上原 才一郎

東京市神田區神保町一丁目五番地

光風館書店

(電話) 神田三〇八七番
(振替) 口座東京三二七番

東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地

株式會社 秀英舍 根本力三

定價各金六十錢

修中三四 小林乙三

O. Kobayashi